別記様式第２号（その１の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

基　本　計　画　書

基本計画

事項	記入欄	備考
計画の区分	学部の学科の設置	
フリガナ 設置者	ｶﾞｯｺｳﾎｳｼﾞﾝ　ﾆｲｶﾞﾀｿｳｺﾞｳｶﾞｸｴﾝ 学校法人　新潟総合学園	
フリガナ 大学の名称	ﾆｲｶﾞﾀｲﾘｮｳﾌｸｼﾀﾞｲｶﾞｸ 新潟医療福祉大学	
大学本部の位置	新潟県新潟市北区島見町1398番地	
大学の目的	教育基本法および学校教育法の精神に基づき、広く保健・医療・福祉に関する専門の学芸を教授研究し、豊かな人間性と高潔な倫理性を涵養し、保健・医療・福祉に関する指導的人材の養成を目指し、もって学術文化の発展に寄与し、人類の福祉の向上に貢献することを目的とする。	
新設学部等の目的	心理健康学科は、心理学及び心身の健康に関する専門的知識と人間を理解するための幅広い教養、専門的知識を用いて課題を発見し、解決する思考力と判断力を養成する。また、人間と社会の諸問題にたえず関心を寄せ、あくなき探求心と豊かな共感力を有し、積極的なリーダーシップと行動力で、問題解決に取り組むことができる態度を涵養する。さらに、豊かな人間性と倫理観を有し、人類と社会の調和的発展とウェルビーイングに貢献できる能力を育成する。	

新設学部等の概要

新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所　在　地
社会福祉学部	年	人	年次 人	人		年　月 第　年次	
心理健康学科	4	80	―	320	学士 （心理学）	令和6年4月 第1年次	新潟県新潟市北区 島見町1398番地
計		80		320			

同一設置者内における変更状況（定員の移行，名称の変更等）	備考
心理健康学科設置認可後 学部名称変更予定 **社会福祉学部→ 心理・福祉学部** **新潟食料農業大学大学院食料産業学研究科食料産業学専攻（Ｄ）（２）（令和5年3月認可申請）**	

教育課程

新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数
	講義	演習	実験・実習	計	
社会福祉学部 心理健康学科	115科目	37科目	5科目	157科目	128 単位

教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等 教授	准教授	講師	助教	計	助手	兼任教員等
			人	人	人	人	人	人	人
	新設分	社会福祉学部 心理健康学科	5	2	1	4	12	0	67
			(5)	(2)	(1)	(4)	(12)	(0)	(20)
		計	5	2	1	4	12	0	67
			(5)	(2)	(1)	(4)	(12)	(0)	(20)
	既設分	リハビリテーション学部 理学療法学科	12	2	12	10	36	1	46
			(12)	(2)	(12)	(10)	(35)	(1)	(46)
		作業療法学科	5	3	2	3	13	0	74
			(5)	(3)	(2)	(3)	(13)	(0)	(74)
		言語聴覚学科	5	4	1	2	12	1	61
			(5)	(4)	(1)	(2)	(12)	(1)	(61)
		義肢装具自立支援学科	4	0	5	2	11	0	76
			(4)	(0)	(5)	(2)	(11)	(0)	(76)
		鍼灸健康学科	4	2	2	1	9	0	46
			(4)	(2)	(2)	(1)	(9)	(0)	(46)
		医療技術学部 臨床技術学科	7	6	4	4	21	3	63
			(7)	(6)	(4)	(4)	(21)	(3)	(63)
		視機能科学科	6	0	2	3	11	0	62
			(6)	(0)	(2)	(3)	(11)	(0)	(62)
		救急救命学科	4	1	3	3	11	0	55
			(4)	(1)	(3)	(3)	(11)	(0)	(55)
		診療放射線学科	5	4	4	4	17	0	50
			(5)	(4)	(4)	(4)	(17)	(0)	(50)
		健康科学部 健康栄養学科	6	4	4	3	17	2	64
			(6)	(4)	(4)	(3)	(17)	(2)	(64)
		健康スポーツ学科	12	8	15	10	45	1	64
			(12)	(8)	(15)	(10)	(45)	(1)	(64)
		看護学部 看護学科	8	4	7	11	30	7	78
			(8)	(4)	(7)	(11)	(30)	(7)	(78)
		社会福祉学部 社会福祉学科	8	2	6	5	21	1	56
			(8)	(2)	(6)	(5)	(21)	(1)	(56)
		医療経営管理学部 医療情報管理学科	8	3	1	7	19	0	58
			(8)	(3)	(1)	(7)	(19)	(0)	(58)
		計	94	43	68	68	273	16	−
			(94)	(43)	(68)	(68)	(273)	(16)	−
	合計		99	45	69	72	285	16	−
			(99)	(45)	(69)	(72)	(285)	(16)	−

教員以外の職員の概要	職種	専任	兼任	計
	事務職員	79人 (79)	27人 (27)	106人 (106)
	技術職員	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	図書館専門職員	4 (4)	2 (2)	6 (6)
	その他の職員	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	計	83 (83)	29 (29)	112 (112)

校地等	区　　分	専　用	共　用	共用する他の学校等の専用	計	
	校舎敷地	72,947.00㎡	0㎡	0㎡	72,947.00㎡	
	運動場用地	58,612.00㎡	0㎡	0㎡	58,612.00㎡	
	小 計	131,559.00㎡	0㎡	0㎡	131,559.00㎡	
	その他	98,365.00㎡	0㎡	0㎡	98,365.00㎡	
	合計	229,924.00㎡	0㎡	0㎡	229,924.00㎡	

校　　舎	専　用	共　用	共用する他の学校等の専用	計	
	57,062.10㎡ (57,062.10　㎡)	0㎡ (　　0　㎡)	0㎡ (　　0　㎡)	57,062.10㎡ (57,062.10　㎡)	

教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	
	49室	40室	123室	一室 (補助職員　人)	一室 (補助職員　人)	大学全体

専任教員研究室	新設学部等の名称	室　　数	
	社会福祉学部　心理健康学科	9　　室	研究室8名8室 合同研究室4名1室

図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	
	社会福祉学部 心理健康学科	430〔70〕 (215〔28〕)	66〔2〕 (44〔1〕)	0〔42〕 (0〔28〕)	14 (7)	588 (588)	24 (24)	大学全体での共用 図書:136,802冊 〔11,180冊〕 学術雑誌:1,472種 (267種)
	計	430〔70〕 (215〔28〕)	66〔2〕 (44〔1〕)	0〔42〕 (0〔28〕)	14 (7)	588 (588)	24 (24)	電子ジャーナル: 7,759種 (6,138種)

図書館	面積	閲覧座席数	収納可能冊数	
	2,083.8㎡	394席	105,360冊	

体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要		
	第1体育館　1,709.43㎡ 第2体育館　630.00㎡ 第3体育館　2,630.51㎡ 第4体育館　1,807.38㎡	屋内プール25m×6コース 硬式野球グラウンド1面 テニスコート4面	屋内走路　1棟 屋内野球練習場　1棟 クラブハウス　1棟 屋内投てき練習場　1棟	大学全体

経費の見積り及び維持方法の概要	区　分	開設前年度	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次	
経費の見積り	教員１人当り研究費等		400千円	400千円	400千円	400千円	― 千円	― 千円	図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費(運用コスト含む)含む。
	共同研究費等		2,150千円	3,000千円	4,000千円	5,000千円	― 千円	― 千円	
	図書購入費	5,000千円	5,000千円	6,000千円	6,000千円	6,000千円	― 千円	― 千円	
	設備購入費	160,600千円	3,000千円	3,000千円	3,000千円	3,000千円	― 千円	― 千円	

学生１人当り納付金	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次
	1,400千円	1,150千円	1,150千円	1,150千円	― 千円	― 千円

学生納付金以外の維持方法の概要	私立大学等経常経費補助金、雑収入　等

	大学の名称	新潟医療福祉大学								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
		年	人	年次 人	人		倍			
既設大学等の状況	リハビリテーション学部						1.05			
	理学療法学科	4	120	—	480	学士 (理学療法学)	1.10	平成30年度	新潟県新潟市北区島見町1398番地	
	作業療法学科	4	50	—	200	学士 (作業療法学)	0.94	平成30年度	同上	
	言語聴覚学科	4	40	—	160	学士 (言語聴覚学)	1.04	平成30年度	同上	
	義肢装具自立支援学科	4	40	—	160	学士 (義肢装具自立支援学)	1.08	平成30年度	同上	
	鍼灸健康学科	4	40	—	40	学士 (鍼灸健康学)	—	令和5年度	同上	令和5年度開設(40名)
	医療技術学部						0.99			
	理学療法学科	4	—	—		学士 (理学療法学)	—	平成13年度	—	平成30年度より募集停止
	臨床技術学科	4	100	—	400	学士 (臨床技術学)	1.01	平成23年度	新潟県新潟市北区島見町1398番地	
	視機能科学科	4	50	—	200	学士 (視機能科学)	0.95	平成26年度	同上	
	救急救命学科	4	55	—	220	学士 (救急救命学)	0.98	平成29年度	同上	
	診療放射線学科	4	90	—	360	学士 (診療放射線学)	1.01	平成30年度	同上	
	健康科学部						1.04		—	
	健康栄養学科	4	40	—	160	学士 (健康栄養学)	1.04	平成19年度	新潟県新潟市北区島見町1398番地	
	健康スポーツ学科	4	250	3年次 5	960	学士 (健康スポーツ学)	1.04	平成19年度	同上	令和3年度入学定員増(50名)
	看護学部						1.02		—	
	看護学科	4	107	3年次 3	434	学士 (看護学)	1.02	平成30年度	新潟県新潟市北区島見町1398番地	
	社会福祉学部						0.99		—	
	社会福祉学科	4	120	3年次 5	490	学士 (社会福祉学)	0.99	平成13年度	新潟県新潟市北区島見町1398番地	
	医療経営管理学部						1.10		—	
	医療情報管理学科	4	80	3年次 5	330	学士 (医療情報学)	1.10	平成22年度	新潟県新潟市北区島見町1398番地	
	医療福祉学研究科						1.27 1.83		—	
	保健学専攻（M）	2	30	—	51	修士 (保健学)	1.38	平成17年度	新潟県新潟市北区島見町1398番地	令和5年度入学定員増(9名)
	社会福祉学専攻（M）	2	5	—	10	修士 (社会福祉学)	0.4	平成17年度	同上	
	健康科学専攻（M）	2	16	—	26	修士 (健康科学) 修士 (看護学)	1.65	平成19年度	同上	令和5年度入学定員増(6名)
	医療情報・経営管理学専攻（M）	2	4	—	8	修士 (医療情報・経営管理学)	0.87	平成26年度	同上	
	医療福祉学専攻（D）	3	20	—	40	博士 (保健学)	1.83	平成19年度	同上	令和5年度入学定員増(10名)

大学の名称	新潟食料農業大学							
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
食料産業学部						0.84		新潟県新潟市北区島見町940番地
食料産業学科	4	180	—	720	学士（食料産業学）	0.84	平成30年度	新潟県胎内市平銀台2417番地
食料産業学研究科						0.83		—
食料産業学専攻（M）	2	6	—	12	修士（食料産業学）	0.83	令和4年度	新潟県胎内市平銀台2417番地
大学の名称	事業創造大学院大学							
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
事業創造研究科						1.08		新潟県新潟市中央区米山3-1-46
事業創造専攻（P）	2	80	—	160	経営管理修士（専門職）	1.08	平成18年度	

附属施設の概要	名称：附属鍼灸センター 目的：臨床実習施設、一般診療 所在地：新潟県新潟市北区島見町1398番地 設置年月：令和５年４月 規模等：室面積172.04㎡

学校法人新潟総合学園　設置認可等に関わる組織の移行表

令和５年度	入学定員	編入学定員	収容定員		→	令和６年度	入学定員	編入学定員	収容定員	変更の事由
新潟医療福祉大学						**新潟医療福祉大学**				
リハビリテーション学部						リハビリテーション学部				
理学療法学科	120		480			理学療法学科	120		480	
作業療法学科	50		200			作業療法学科	50		200	
言語聴覚学科	40		160			言語聴覚学科	40		160	
義肢装具自立支援学科	40		160			義肢装具自立支援学科	40		160	
鍼灸健康学科	40		160			鍼灸健康学科	40		160	
医療技術学部						医療技術学部				
臨床技術学科	100		400			臨床技術学科	100		400	
視機能科学科	50		200			視機能科学科	50		200	
救急救命学科	55		220			救急救命学科	55		220	
診療放射線学科	90		360			診療放射線学科	90		360	
健康科学部						健康科学部				
健康栄養学科	40		160			健康栄養学科	40		160	
健康スポーツ学科	250	3年次 5	1010			健康スポーツ学科	250	3年次 5	1010	
看護学部						看護学部				
看護学科	107	3年次 3	434			看護学科	107	3年次 3	434	
社会福祉学部						心理・福祉学部				名称変更予定
社会福祉学科	120	3年次 5	490			社会福祉学科	120	3年次 5	490	
（うち介護福祉コース）	(40)		(160)			（うち介護福祉コース）	(40)		(160)	
						心理健康学科	80		320	学科の設置（認可申請）
医療経営管理学部						医療経営管理学部				
医療情報管理学科	80	3年次 5	330			医療情報管理学科	80	3年次 5	330	
	1,182	3年次 18	4,764				1,262	3年次 18	5,084	
新潟医療福祉大学大学院						**新潟医療福祉大学大学院**				
医療福祉学研究科						医療福祉学研究科				
保健学専攻（M）	30		60			保健学専攻（M）	30		60	
社会福祉学専攻（M）	5		10			社会福祉学専攻（M）	5		10	
健康科学専攻（M）	16		32			健康科学専攻（M）	16		32	
医療情報・経営管理学専攻（M）	4		8			医療情報・経営管理学専攻（M）	4		8	
医療福祉学専攻（D）	20		60			医療福祉学専攻（D）	20		60	
計	75		170			計	75		170	
新潟食料農業大学						**新潟食料農業大学**				
食料産業学部						食料産業学部				
食料産業学科	180		720			食料産業学科	180		720	
計	180		720			計	180		720	
新潟食料農業大学大学院						**新潟食料農業大学大学院**				
食料産業学研究科						食料産業学研究科				
食料産業学専攻（M）	6		12			食料産業学専攻（M）	6		12	
						食料産業学専攻（D）	2		6	課程変更（認可申請）
計	6		12			計	8		18	
事業創造大学院大学						**事業創造大学院大学**				
事業創造研究科						事業創造研究科				
事業創造専攻（P）	80		160			事業創造専攻（P）	80		160	
計	80		160			計	80		160	

別記様式第２号（その２の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　課　程　等　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
基礎教養科目群	基礎ゼミ	1前	1				○		5	2	1	4			
	情報処理Ⅰ	1前	1				○							兼1	メディア集中
	情報処理Ⅱ	1後	1				○							兼1	メディア集中
	情報処理Ⅲ	2前		1			○							兼1	
	英語Ⅰ	1前	1				○							兼1	
	英語Ⅱ	1後	1				○							兼1	
	アカデミック英語Ⅰ	2･3･4前		1			○							兼1	
	アカデミック英語Ⅱ	2･3･4後		1			○							兼1	
	アカデミック英語Ⅲ	2･3･4後		1			○							兼1	集中
	韓国語Ⅰ	1･2後		1			○							兼1	
	中国語Ⅰ	1･2後		1			○							兼1	
	スペイン語Ⅰ	1･2後		1			○							兼1	
	ドイツ語Ⅰ	1･2後		1			○							兼1	
	韓国語Ⅱ	2･3前		1			○							兼1	
	中国語Ⅱ	2･3前		1			○							兼1	
	スペイン語Ⅱ	2･3前		1			○							兼1	
	ドイツ語Ⅱ	2･3前		1			○							兼1	
	日本語表現法Ⅰ	1後		1		○						1			
	日本語表現法Ⅱ	1後		1		○						1			
	スポーツ・健康	1前	1				○							兼1	
	スポーツ・実践	2･3･4前･後		1			○							兼1	集中
	哲学	1前		1		○								兼1	メディア集中
	倫理学	1後		1		○								兼1	メディア集中
	ジェンダー論	1前		1		○								兼1	メディア集中
	科学論	1後		1		○								兼1	メディア集中
	情報科学	1後		1		○								兼1	メディア集中
	研究プロジェクト演習Ⅰ	1後		1			○							兼1	集中
	研究プロジェクト演習Ⅱ	2前		1			○							兼1	集中
	研究プロジェクト演習Ⅲ	2後		1			○							兼1	集中
	研究プロジェクト演習Ⅳ	3前		1			○							兼1	集中
	研究プロジェクト演習Ⅴ	3後		1			○							兼1	集中
	研究プロジェクト演習Ⅵ	4前		1			○							兼1	集中
	小計（32科目）	－	6	26	0	－			5	2	1	4	0	兼11	
保健医療福祉教養科目群	ボランティアの世界	1前		1		○								兼1	メディア集中
	コミュニケーション学入門	1前		1		○								兼1	メディア集中
	対人コミュニケーション論	1後		1		○								兼1	メディア集中
	心理学の世界	1後		1		○			1						
	人間を知る	1前		1		○								兼1	
	命の倫理	1後		1		○								兼1	メディア集中
	QOLの世界	1後		1		○								兼1	
	こどもの世界	1後		1		○								兼1	
	アスリートの世界	1前		1		○								兼1	メディア集中
	臨床医の世界	1後		1		○								兼1	
	加齢と身体	1後		1		○								兼1	メディア集中
	食を楽しむ	1前		1		○								兼1	メディア集中
	眼の神秘	1前		1		○								兼1	メディア集中
	義肢装具の世界	1後		1		○								兼1	
	新潟学	1後		1		○								兼1	
	国際保健の世界	1後		1		○								兼1	メディア集中
	国民の生活と健康を支える仕組み	1前		1		○								兼1	
	現代社会と経済	1前		1		○								兼1	
	法学Ⅰ	1後		1		○								兼1	メディア集中
	法学Ⅱ	1後		1		○								兼1	メディア集中
	臨床の哲学	1前		1		○								兼1	メディア集中
	臨床技術の世界	1前		1		○								兼1	メディア集中
	留学の魅力	1前		1		○								兼1	メディア集中
	シティズンシップ教育入門	1後		1		○								兼1	
	放射線の基礎と人体への影響	1前		1		○								兼1	メディア集中
	新潟水俣病の理解	1前		1		○								兼1	メディア集中
	統計入門	1後		1		○								兼1	
	一次救命処置法	1前		1		○								兼1	
	東洋医学的養生	1前		1		○								兼1	
	自然人類学概論	1後		1		○								兼1	
	データサイエンス概論	1後		1		○								兼1	メディア集中
	比較認知科学の世界	1前		1		○			1						
	アカデミック・ライティング	1後		1		○			1						
	小計（33科目）	－	0	33	0	－			3	0	0	0	0	兼23	

別記様式第２号（その２の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　課　程　等　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
保健医療福祉連携科目群	連携基礎ゼミ	2後	1				○		5	2	1	4			
	チームアプローチ入門	1後		1		○								兼1	メディア集中
	保健医療福祉連携学	2･3前		1		○								兼1	メディア集中
	地域連携学	3前		1		○								兼1	集中
	連携総合ゼミ	3後･4前		1			○							兼1	集中
	社会連携実践演習Ⅰ	1･2･3･4前		1			○							兼1	集中
	社会連携実践演習Ⅱ	1･2･3･4後		1			○							兼1	集中
	小計（7科目）	－	1	6	0	－			5	2	1	4	0	兼3	
専門基礎科目群	心理学概論Ⅰ	1前	2			○			2						オムニバス
	心理学概論Ⅱ	1後	2			○			2						オムニバス
	臨床心理学概論	2前		2		○				1					
	運動心理学概論	1前		2		○			1						
	心理学研究法Ⅰ	1後		2		○			1						
	心理学研究法Ⅱ	2前		2		○				1		1			オムニバス
	心理学統計法Ⅰ	1後		2		○			1						
	心理学統計法Ⅱ	2前		2		○				1		1			オムニバス
	心理学基礎実験	2前	2					○	2	1		1			共同
	心理学実験	3前	2					○	2	1		1			共同
	比較認知科学	1前		2		○			1						
	記憶の科学	3後		2		○								兼1	メディア集中
	ストレスと脳	1前		2		○						1			
	脳とこころ	1後		2		○				1					
	心理プログラミング	3前		2		○			1						
	精神医学	2後		2		○								兼1	
	メンタルトレーニング	2前		2		○			1						
	スポーツ心理臨床	2後		2		○						1		兼1	オムニバス共同(一部)
	コーチングの心理	3後		2		○			1			1			オムニバス
	スポーツ心理学	2前		2		○								兼1	メディア集中
	競技スポーツの心理学	3前		2		○								兼1	メディア集中
	スポーツカウンセリング	2後		2		○								兼1	メディア集中
	アダプテッドスポーツ論	2後		2		○								兼1	メディア集中
	社会福祉概論	1前		2		○								兼1	
	精神保健学	2後		2		○								兼1	
	介護概論	3前		2		○								兼1	
	高齢者福祉論Ⅰ	2前		2		○								兼1	
	高齢者福祉論Ⅱ	2後		2		○								兼1	
	児童家庭福祉論Ⅰ	3前		2		○								兼1	
	児童家庭福祉論Ⅱ	3後		2		○								兼1	
	障害者福祉論Ⅰ	3前		2		○								兼1	
	障害者福祉論Ⅱ	3後		2		○								兼1	
	小計（32科目）	－	8	56	0	－			3	2	0	2		兼10	

別記様式第２号（その２の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　課　程　等　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門専攻科目群	感覚・知覚心理学	2後		2		○			1			1			オムニバス
	認知・言語心理学	2後		2		○			1						
	学習心理学	3後		2		○				1					
	感情・人格心理学	2前		2		○				1				兼1	オムニバス 共同(一部)
	神経心理学	2後		2		○				1					
	進化・生理心理学	3前		2		○			1						
	発達心理学	2前		2		○			1						
	教育・学校心理学	3前		2		○					1			兼1	メディア オムニバス 共同(一部)
	青年心理学	3後		2		○								兼1	
	健康・医療心理学	2前		2		○			1						
	福祉・家族心理学	2後		2		○						1		兼1	オムニバス 共同(一部)
	障害心理学	3前		2		○						1		兼1	メディア オムニバス 共同(一部)
	社会心理学	2前		2		○			1						
	集団心理学	2前		2		○						1			
	産業・組織心理学	3後		2		○								兼1	メディア 集中
	心理的アセスメント	2前		2		○					1				
	心理学的支援法	2後		2		○			1						
	司法・犯罪心理学	3前		2		○								兼1	メディア 集中
	人体の構造と機能及び疾病	3前		2		○								兼1	集中
	精神疾患とその治療	2後		2		○								兼1	
	関係行政論	3後		2		○			1					兼4	メディア 集中 オムニバス
	公認心理師の職責	3後		2		○			1						
	認知脳科学概論	3後		2		○								兼1	メディア 集中
	神経生理学	3前		2		○								兼1	メディア 集中
	生態心理学	3前		2		○								兼1	メディア 集中
	心理療法各論A(認知行動療法)	2後		2		○			1						
	心理療法各論B(力動的心理療法)	3前		2		○				1					
	心理療法各論C(自然体験療法)	3後		2		○								兼1	集中
	司法精神医療	3前		2		○			1						
	ブリーフ・セラピー	3後		2		○					1				
	プロセスワーク	2前		2		○								兼1	集中
	教育相談論	3前		2		○			1						
	学校臨床心理学	3後		2		○								兼1	
	精神分析学	2後		2		○				1					
	発達と障害児の心理	2前		2		○						1			
	健康・医療におけるコミュニケーション論	2後		2		○								兼1	
	運動学習論	3後		2		○			1						
	健康運動心理学	2前		2		○			1			1		兼1	オムニバス 共同(一部)
	ダンス・セラピー	3後		2		○								兼1	集中
	ボディワーク	2後		1			○							兼1	集中
	キャンプ・カウンセリング	2前		1			○							兼1	集中
	心理健康科学特別講義A	2・3・4前		1		○								兼1	集中
	心理健康科学特別講義B	2・3・4前		1		○								兼1	集中
	心理健康科学特別講義C	2・3・4後		1		○								兼1	集中
	心理演習	3後		1			○			1	1				共同
	心理実習Ⅰ	4前		1				○	1	1	1				共同
	心理実習Ⅱ	4後		1				○	1	1	1				共同
	インターンシップ実習	3前		1				○				1			
	心理健康基礎ゼミ	2後	1				○		5	2	1	4			
	専門ゼミⅠ	3前	1				○		5	2	1				
	専門ゼミⅡ	3後	1				○		5	2	1				
	卒業研究A	4前	3				○		5	2	1				
	卒業研究B	4後	3				○		5	2	1				
	小計（53科目）	－	9	87	0	－			5	2	1	4	0	兼20	—
合計（157科目）		－	24	208	0	－			5	2	1	4	0	兼67	—

別記様式第２号（その２の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　課　程　等　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	

学位又は称号	学士（心理学）	学位又は学科の分野	文学関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
基礎教養科目群から必修6単位を含め10単位以上、保健医療福祉教養科目群及び保健医療福祉連携科目群から必修1単位を含め14単位以上、専門基礎科目群から必修8単位を含め42単位以上、専門専攻科目群から必修9単位を含め62単位以上、あわせて128単位以上を修得すること。 （履修科目の登録の上限：46単位（年間）） 1学年の学期区分	2期	
1学期の授業期間	15週	
1時限の授業時間	90分	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	基礎ゼミ	大学生活への円滑な導入を目標とする。これを実現するために、少人数のグループに分かれ、演習等を通して、コミュニケーションの基礎能力を身につける。また、それぞれの専門分野を学習するために必要とされる基礎的な技術や知識を習得する。 具体的には、ゼミ別にテーマを設定し、その追究の過程において適切な情報収集の方法（図書館の利用方法を含む）やレポートの書き方等の基礎を学ぶ。また、各専門職におけるキャリアデザインについても取り扱う。	
	情報処理Ⅰ	本科目では、情報社会の倫理として情報利用者としてのモラルを含めた総合的な情報リテラシー教育を目的とし、現代社会の情報資源を適切に活用するために基本的な情報処理能力を習得する。本科目で取り扱う学修内容は、本学ポータルサイト、E-mail、学内LANなどの学内情報資源の基本的な使い方とワープロソフト（Word）、表計算ソフト（Excel）、プレゼンテーションソフト（PowerPoint）の基礎的な使い方を学習する。この科目を基礎として「情報処理Ⅱ」の学びへとつなげる。	
	情報処理Ⅱ	「情報処理Ⅰ」に引き続き、情報社会の倫理として情報利用者としてのモラルを含めた総合的な情報リテラシー教育を目的とし、現代社会の情報資源を適切に活用するために基本的な情報処理能力を習得する。本科目で取り扱う学修内容は、各時間に提示する課題に沿ったファイル作成の演習を中心とし、Excelの基本操作、データの分析、グラフ作成、Wordの基本操作、図表の取り込み、体裁のよい読みやすい文書作成、PowerPointを応用するスキルを身につける。	
	情報処理Ⅲ	本科目では「情報処理Ⅰ・Ⅱ」の学修をもとに、より発展的な内容を取り扱い、現代社会の情報資源を適切に活用するために基本的な情報処理能力を習得する。 具体的には、Excel検定３級（表計算処理技能認定試験３級）クラスでは、基本的なワークシートの作成、グラフ、データベースの機能を中心に基本的な操作方法を修得する。また、Excel検定２級（表計算処理技能認定試験２級）クラスでは、さらに、その応用的な機能やさまざまな関数の活用ができることを目標とし、応用的な情報処理能力の修得を目指す。	
	英語Ⅰ	QOL （Quolity of Life：生活の質）に意識を向けた英語を実際に使う経験を通し、現段階の英語の力（主に語彙力、文法力）を伸張させ基本的な英語力を高めながら、保健医療福祉に関する教材を用いて、専門的な語彙や表現に親しむとともに、保健医療福祉の話題に対する関心も高めることを目的とする。本科目はグループでの協働学習やアクティビティが中心となり、英語を使い、考えながら、扱う話題のコンテンツに対する理解や思考を深め、グローバルな医療コミュニケーションへの意識を高める。	
	英語Ⅱ	「英語Ⅰ」での学習内容を踏まえ、QOL をテーマに英語を実際に使う演習を通し、現段階の英語の力（主に語彙力、文法力）などの基礎言語力をさらに伸張させる。保健医療福祉に関する教材を通して、専門領域の語彙や表現に親しむとともに、グローバルな視点で保健医療福祉の話題に対する関心も高めることを目的とする。本科目においてもグループでの協働学習やアクティビティを中心とし、内容を発展的に考え、議論するための英語の学び方を修得する。	
	アカデミック英語Ⅰ	履修者の専門領域における学びとの連携を意識した内容を扱い、英語を用いて学術分野を学び、またキャリアパスにつなげるための基礎的なスキルを身につける。英語文献の検索方法や批判的な読み方などのリーディングスキル、英文ライティング、各種プレゼンテーションスキル、専門領域でのコミュニケーションスキル、ディスカッション、医療福祉施設等において求められる言語的基礎力、グローバルマインドセット、コミュニケーションスキルの修得などである。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	アカデミック英語Ⅱ	履修者の専門領域における学びとの連携を意識した内容を扱い、英語を用いて学術分野を学び、またキャリアパスにつなげるための基礎的なスキルを身につける。英語文献の検索方法や批判的な読み方などのリーディングスキル、英文ライティング、各種プレゼンテーションスキル、専門領域でのコミュニケーションスキル、ディスカッション、医療福祉施設等において求められる言語的基礎力、グローバルマインドセット、コミュニケーションスキルの修得などである。	
	アカデミック英語Ⅲ	履修者の専門領域における学びとの連携を意識し、アカデミック英語I及びIIを発展させたより高度な内容を扱い、英語を用いて学術分野を学ぶためのより高度なスキルを身につける。具体的には、大学院準備を含めた履修者のニーズに合わせ、より多くの英語論文を批判的に読むスキミング、スキャニング、パラグラフリーディングなどのスキル、また、英文要旨を書くなどの英語運用能力、さらに、国内外の医療福祉健康の事情を学びながら専門分野での英語コミュニケーションのトレーニングを行うなどである。	
	韓国語Ⅰ	朝鮮韓国語の文字であるハングルの字体と発音、並びに基本的な文法事項を学ぶことで、基礎的なコミュニケーション（あいさつや自己紹介、簡単な意思表現等）を韓国語で出来るスキルを演習を通して身につける。また、言語知識的側面だけでなく、韓国の地理、歴史、文化、社会、日本との関わりに関心を持ち、理解を深める。本科目では、ハングルの読み書きができること、コミュニケーションや異文化理解にかかわる基本的な語彙や文章を理解できることを目標とする。	
	中国語Ⅰ	中国語（標準語、普通話）の基本的な文法事項、発音を学び、演習を通して基本的なコミュニケーション（あいさつや自己紹介、簡単な意思表現等）を中国語で出来るスキルを身につける。言語知識だけでなく、中国の地理、歴史、文化、現代事情、中国人の生活ぶり、日本との関わりなど幅広い知識を得ることで、異文化理解を深めることも目的とする。本科目では、簡体字に親しみ、声調とピンインを正しく発音できること、基本文型を身につけ応用することができることを目標とする。	
	スペイン語Ⅰ	スペイン語の読み方、基本的な文法事項、発音を学び、基本的なコミュニケーション（あいさつや自己紹介、簡単な意思表示等）のスキルを身につける。言語学的知識にとどまらず、スペイン語が話されている多くの地域について、地理、歴史、社会や文化、日本との関わりへの関心を高め、理解を深めることも目的とする。授業は講師が用意するハンドアウトをもとに、会話表現を中心とした演習を通してスペイン語の言語学的基礎とコミュニケーションスキルを身につける。	
	ドイツ語Ⅰ	ドイツ語の発音や正書法を含めた読み方および基本的な文法事項を学び、演習を通してあいさつや自己紹介、簡単な意思表示等のコミュニケーションスキルを身につける。また、ドイツおよびドイツ語圏の歴史、文化、社会や日本との関わりへの関心を高め、理解を深めることを通じて異文化理解につなげることも目的とする。本科目はグループタスクを中心とした演習的授業展開とし、日常生活のさまざまな場面を想定した場面においてドイツ語で表現できるようになることを目標とする。	
	韓国語Ⅱ	「韓国語Ⅰ」に引き続き、ハングルをより正確に読み、かつ正しく発音する練習から、場面シラバスに基づいた演習を通して、場面ごとに使用される語句表現を学ぶ。基本的な文法を復習しながら発展させ、韓国語で意思疎通ができる力をつけることが目標である。また、韓国の幅広い音楽、映画などを通して、文化や社会などについての関心や理解を高めていく。なお、本科目は「韓国語Ⅰ」で学んだ事項をもとに展開されることから、「韓国語Ⅰ」を履修済みの学生が受講できる科目である。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教養科目群	中国語Ⅱ	「中国語Ⅰ」を基礎とし、具体的な生活場面を想定した中国語会話表現の演習や、中国、中国語圏の文化や習慣などについてより発展させて学ぶ。中国語会話演習を通じて、言語学的知識にとどまらず、外国語学習から得られる異文化理解や異文化コミュニケーション、日本との関わりへの関心を深めることで、視野をよりグローバルに広げることを目的とする。なお、本科目は「中国語Ⅰ」で学んだ事項をもとに展開されることから、「中国語Ⅰ」を履修済みの学生が受講できる科目である。	
	スペイン語Ⅱ	「スペイン語I」を基礎とし、スペイン語会話演習を通して、語彙、発音、重要表現を学びつつ、学習した言語を応用した会話文を自ら作成しインタラクティブな演習をすることで、言語能力応用力をさらに高めていく。会話の内容は、日常会話、仕事、旅行、留学先での場面であり、実際に活用できる実践的な場面を設定していく。なお、本科目は「スペイン語Ⅰ」で学んだ事項をもとに展開されることから、「スペイン語Ⅰ」を履修済みの学生が受講できる科目である。	
	ドイツ語Ⅱ	「ドイツ語I」で学んだドイツ語の基本的な発音、語句表現等を基礎とし、実際に「聞く」「話す」ことを中心にした演習を中心にしたドイツ語の基礎的な会話の修得を目指す。言語的知識に加えて、現在のドイツ事情や日本と比較した異文化について学ぶことで、ドイツ語を介した日常的コミュニケーションができることを目標にする。なお、本科目は「ドイツ語Ⅰ」で学んだ事項をもとに展開されることから、「ドイツ語Ⅰ」を履修済みの学生が受講できる科目である。	
	日本語表現法Ⅰ	高等教育を推し進めていく上で必要とされる「読む」「書く」「発表する」ことを中心とした日本語の文章作成能力の修得を目標とし、その能力の向上を図る。本科目では、ディクテーション（聞き書き）、口頭発表トレーニング等を行い、それらを通じて一般的に用いられる語彙及び簡単な専門用語を学習し、情報を正確に記載する力や伝える力の向上を目指すとともに、日常会話とは異なる公的な文書について理解し、レポートの書き方について学修する。	
	日本語表現法Ⅱ	「日本語表現法Ⅰ」における学修をもとに、「読む」「書く」「話す」「発表する」ことを中心とした日本語の会話能力、発表能力及び文章記述能力の修得を目標とし、その能力の継続的向上を目指す。本科目では、文章を読み、それを要約する文章読解要約トレーニング、表、図、グラフ等の情報理解トレーニング、簡単な専門用語を読み、書き、説明できるとトレーニング等を行う。また、レポートと論文との違いについて、いっそう理解を深める。	
	スポーツ・健康	本科目は運動・スポーツを通してQOLを支える優れた人材を育成することを理念に掲げ、車椅子バスケットボール等の実践を通して、次の3点の修得を目指すこととする。 1）自らの身体について正しく理解できるようになるために、健康科学に関する基礎的な知識を理解する。2）保健・医療・福祉・スポーツ分野の専門職に必要とされる体力を養成できるようになるために、適切な運動方法を身につける。3）運動・スポーツの文化的価値を認識できるようになるために、多様なスポーツ活動に取り組む。	
	スポーツ・実践	本科目では、「スポーツ・健康」に引き続き、保健・医療・福祉・スポーツ分野の専門職に必要とされる体力を養うために、適切な運動方法や知識（各運動種目の特性、運動・スポーツの意義、運動・スポーツと体力の関係、ルール、マナー、安全管理等含む）を身につける。加えて、生涯にわたり、自身に適した運動・スポーツを継続して楽しめるようになるため、多様な運動・スポーツ種目（球技系スポーツ、アダプテッドスポーツ、レクリエーションスポーツ、野外活動等）を通して、より質の高い実践力を育む。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	哲学	哲学とは、人間（人生）や世界（世の中）について根本的に考える学問である。古代ギリシアで哲学が誕生して以来、人々は人間や世界について考えてきた。特に「存在」「認識」「言葉」が哲学の大きなテーマである。なぜ哲学が生まれ、どのような方法を用いているのか。そして私たち人類にとってどのような役割を果たし、今後どのように役に立つのか。哲学philosophyは愛philosと知sophiaからなるギリシア語に由来し、知を愛することである。哲学は専門家に独占される専門知に限らない。これからの先行き不透明な時代において、現代社会をどう理解すればよいか、そしてどのように行動すればよいかについて、哲学は役に立つ学問である。授業の後半では具体的な事例から考えていく。	
	倫理学	倫理学とは「よい・わるい」「正しい・誤り」といった「価値」の根拠（理由）について考える学問である。科学技術の進歩は人間の能力を日々拡張していますが、それによって新たな倫理的課題も生じている。遺伝子操作の許される範囲、さらに身体や精神のさまざまな操作など。授業の後半では具体的な事例から考える。たとえば野球において、強打者を5打席連続で敬遠することはフェアプレイに反する「悪い」行為なのか。あるいは勝利を追求した「正しい」戦術なのか。倫理学は、これからの自分と他者（環境も含む）の関係や、世の中をどう考えればよいか、そしてどのように行動すればよいかついて役に立つ学問である。	
	ジェンダー論	前半は「近代」をキーワードに、女性が置かれてきた社会的地位を振り返り、近代社会がどのようなジェンダー構造を歴史的に構築してきたのかを理解する。同時に、女性解放運動（フェミニズム）の主張や成果を概観しながら、未だに解決されない男女の賃金格差や女性リーダーが増えない要因について探り、解決策を考察する力を養うことを目標とする。 後半は、「身体」をキーワードに、「男女」を非対称な存在として意味づけ、作り上げていくジェンダー構造について、社会学や哲学の理論を紹介しながら理解することを目標にする 総じて、女性学やジェンダー研究によって蓄積された研究視点を用いながら、われわれがどのような制度の中でそれぞれの「性別」として生かされているのかに気づき、どのような社会を目指していきたいのかについて模索することをテーマとする。	
	科学論	科学とは、さまざまな対象を特定の目的・方法で研究することで、広義には学問と同じである。。東日本大震災の際に各分野の専門家が「想定外」という言葉を使用して批判されたが、経験科学では「想定外」は考慮できない。しかしこれからの先行き不透明で予測困難な時代においては「想定外」を含めた科学が求められる。私たち人類の可能性と限界を考慮した場合、科学的態度である「反証可能性」は今後の私たちがどのように行動すればよいか重要な示唆を与えてくれるものである。	
	情報科学	本授業では、コンピュータやスマートフォン等の機器を利用した情報の収集、整理、分析、伝達といった情報リテラシーだけでなく、人間の情報処理メカニズムに関する基礎的な素養を身につけることが目的である。教養として情報機器を利用する際の基本的なルールを十分に理解し、人間の情報処理特性を踏まえたうえで現実の社会問題を解決できるように「情報」の科学的な理解を目指すことが本授業のねらいある。分野の垣根を越え、学際的に学修する。	
	研究プロジェクト演習Ⅰ	学生は、自分の興味のある分野や特定のテーマを探し求め、自ら指導を受ける教員を選び、相談に行き、教員の合意を得て、見学や模倣などを通して指導教員から実用的なスキルや知識の基礎を学ぶ。「初心者」としてできる範囲内で研究活動を展開し、それを通して研究の意義や楽しさを体得する。これらの一連の主体的な学びを通して、実際の研究活動のステージ進行の概要を理解できるようになる。成果は、期末の発表会での研究についての発表により評価する。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	研究プロジェクト演習Ⅱ	学生は、自分の興味のある分野や特定のテーマをさらに探求し、指導を受ける教員との相談を続け、教員の合意を得て、見学や模倣、部分的な実践などを通して指導教員から実用的なスキルや知識の基礎をさらに学ぶ。研究プロジェクト演習Ⅰを履修していなくても、この科目から研究活動を開始してもよい。研究活動の展開を通して、研究の意義や価値を実感する。これらの一連の主体的な学びの継続を通して、実際の研究活動のステージ進行をより深く理解できるようになる。成果は、期末の発表会での研究についての発表より評価する。	
	研究プロジェクト演習Ⅲ	学生は、自分の興味のある分野や特定のテーマをさらに追求し、指導を受ける教員との相互関係を維持し、教員の合意を得て、見学や模倣、助言を得ながらの大部分の実践などを通して指導教員から実用的なスキルや知識の応用を学ぶ。研究プロジェクト演習ⅠやⅡを履修していなくても、この科目から研究活動を開始してもよい。研究活動の展開を通して、研究の意義や発展の可能性を納得する。これらの一連の主体的な学びの継続を通して、実際の研究活動のステージ進行を説明できるようになる。成果は、期末の発表会での研究についての発表より評価する。	
	研究プロジェクト演習Ⅳ	学生は、自分の興味のある分野や特定のテーマを確信し、指導を受ける教員との相互関係を発展させ、教員の合意を得て、見学や模倣、一人での大部分の実践などを通して指導教員から実用的なスキルや知識の応用を深く学ぶ。研究プロジェクト演習ⅠやⅡ、Ⅲを履修していなくても、この科目から研究活動を開始してもよい。研究活動の展開を通して、研究の意義や発展の可能性を自らの卒業研究のテーマに結びつける。これらの一連の主体的な学びの発展を通して、実際の研究活動のステージ進行についての学びを自らの卒業研究に応用できるようになる。成果は、期末の発表会での研究についての発表より評価する。	
	研究プロジェクト演習Ⅴ	学生は、自分の興味のある分野や特定のテーマを広く認識し、自らの卒業研究のテーマについて研究プロジェクト演習Ⅴの指導教員からも助言を受け、主体的な研究の実践を通して、他の学生とスキルや知識を高め合いながら、深い学びを経験する。研究プロジェクト演習ⅠやⅡ、Ⅲ、Ⅳを履修していなくても、この科目から研究活動を開始してもよい。研究の実践を通して、自らの研究のテーマを他の学生に伝えていく。これらの総合的な学びの経験を通して、自らの研究の新規性を多面的に説明できるようになる。成果は、期末の発表会での研究についての発表より評価する。	
	研究プロジェクト演習Ⅵ	学生は、自分の興味のある分野や特定のテーマの将来的展望まで想像を広げ、自らの卒業研究の成果について研究プロジェクト演習Ⅵの指導教員からも助言を受け、自らの研究成果の吟味し、指導教員や他の学生との議論を通して内容を深める。研究プロジェクト演習ⅠやⅡ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴを履修していなくても、この科目から研究活動を開始してもよい。研究の実践を通して、自らの研究の集大成を大学院への進学などの将来の礎とする。ここまでの完結した学びの経験を通して、研究者となる素養を身に付ける。成果は、期末の発表会での研究についての発表より評価する。	
	ボランティアの世界	ボランティアの活動者として自己実現や社会貢献の機会となる側面と将来の保健・医療・福祉、スポーツ分野の専門職として連携・協働を図るパートナーとしての側面の両方の立場を理解できるよう、各テーマ（災害の問題、子どもの問題、高齢者の問題、障がい者の問題、環境の問題、福祉教育）における様々な活動事例を通してボランティアの意義と本質、ボランティアとさまざまな領域がつながりを持つことの理解、福祉教育とボランティア活動の関係性を理解する。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	コミュニケーション学入門	コミュニケーションおよびコミュニケーション能力の基礎理論、概念を日常の具体例を用いながら学ぶ。コミュニケーションとは何であるかについて理解を深めていくことで、日常生活や将来就くであろう保健・医療・福祉・スポーツの専門職として遭遇する様々な状況で内省できる素地を作ることを目的とする。日常の些細な出来事やさまざまな現象に対する洞察力を高めるとともに、より良い人間関係の形成のための素養を高め、実践しようとすることを目指す。	
	対人コミュニケーション論	コミュニケーション論の基本的な理論をふまえ、特に医療や福祉の文脈における対人コミュニケーションの実際や多様な問題を多角的な視点から見ようとする力を身につけることを目的とする。特に、普段は意識が向けられることがあまりないマイノリティへのまなざしについて注目し、保健医療福祉スポーツ教育の分野の専門職として持つべき視点を得ようとする意欲を高める。また社会が個人の自己概念に与える影響や対人関係に及ぼす影響についても考えを深め、社会の構成員としてそれぞれができることについて取り組む姿勢を醸成する。	
	心理学の世界	「心理学の過去は長く、歴史は短い」といわれるように心理学の歴史はギリシャ時代にさかのぼることができるが、ここでは科学的な研究法を用いる心理学の世界を紹介する。心理学は、哲学、言語学、社会学、生物学、神経科学、情報学など様々な視点で研究され、それらの分野との重なりも大きい。本講義では、他の学問分野との関わりから総合的な科学としての心理学の立場を維持して、心理学の世界を客観的に紹介して科学的研究と生活の中での心の世界との関係をわかりやすく講義し、心理学の将来像を考察する。	
	人間を知る	人間として生きるとはどういうことかを根源的に探究することは保健医療福祉を志す初学者にとって必須である。人間としての存在意義を哲学的な側面からとらえ、人間とは何かを我－汝の関係から考察し、人として生きる根幹について論じる。人の間の生き方、哲学に人間の本質を置いて学修するとともに、本学の理念とあわせて、自己の生き方の基本を学ぶことにより、人間の尊厳と自立についての考えをいっそう深めることを科目の達成目標とする。	
	命の倫理	医療従事者には、医学・医療の知識や技術のみでなく、倫理的問題への対応能力が要求される。保健医療福祉に携わるものとして、特に基本となる生命および人権の尊重について焦点を当て、自他の命や人権を深く考えられるような態度を育むことを目的とする。保健医療福祉に関する現代のさまざまなトピックスを挙げ、これらを通して自身が人の命をどのように受け止めているか、また、保健医療福祉における命の倫理に関わる諸問題について説明できることを目標とする。	
	QOLの世界	本学の理念であるQOLについて、その定義や重視されるようになってきた歴史的な背景を学習する。さらに、QOLという用語を活用できるようになるために、事例を通して実証的に理解する。具体的には、ひとの生きがい、人生の幸福・満足感を知るために、社会の発展に貢献したモデル事例の行動や生き方を調査し、QOLとは何かを問う。一方で、本学の学生が目指す医療・福祉・健康領域に関連する健康関連QOLについて、その構成概念や測定方法を社会で汎用されている評価尺度を用いて学習する。	
	こどもの世界	本科目では、こどものトータルな発達について、神経系を中心として身体・心理・遊び等の観点から紹介し、自身の発達の足跡を振り返る。また、近年話題になることが多い発達障がい、児童虐待、いじめ等のトピックについて取り扱い、こどもの世界について考える足掛かりを提供する。授業を通してこどもの神経系・認知・遊びの発達等について理解するとともに、上述のトピックスについて自分なりの考えを持つことができることを目標とする。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	アスリートの世界	アスリートは各競技会で優秀な成績を修めるために多くの時間を費やしている。その競技に対する姿勢や哲学を学び、より高度なパフォーマンスを支えるための「心・技・体」とは何なのかを学ぶ。また、アスリートを支える環境はどのようになっているのか等を講義形式の中で検証していく。 講義ではトレーニング方法のみならず、幼少期からのスポーツに関わり方や目標設定の仕方等、アスリートについて幅広く学び、その実践方法から自らの生き方に対するヒントを得ることを目標とする。	
	臨床医の世界	保健・医療・福祉の専門職は、プロフェッショナリズム、批判的思考、対人コミュニケーションスキルなどをアウトカムとして修得することも必要である。種々の領域における現役の臨床医(内科医、小児科医、リハビリテーション医、神経内科医、整形外科・スポーツ医、耳鼻科咽頭科医、精神科医)の活動を知ることで、自らが目指す専門職のためにこれらのアウトカムについて知り、修得していく心構えを作ることを目的とする。	
	加齢と身体	人の心身機能は加齢に伴い様々に変化する。身体の構造と機能のうち、骨・関節・筋肉・神経などの運動器、肺などの呼吸器、心臓・血管などの循環器、記憶や判断などの認知機能が衰え、やがて日常生活にも支障をきたす状態になり、周囲のサポートが必要になる。つまり加齢に伴う身体の変化である老化を理解することは、QOLサポーターを目指す本学の学生に共通したテーマである。学生は、人の老化がどのような経過をたどり、どのようなことをきっかけに要介護の状態になるか、要介護を予防するために行われている健康増進の施策、介護予防プログラム、リハビリテーションについて学習する。	
	食を楽しむ	「食」は、私たちにとって生きていく上で栄養を補給するためのものだけでなく、楽しみ・喜びを与えてくれるものでもある。本科目では、食に関連する様々な情報から、「食」がいかに普段の生活や身心の健康と深く関連しているかを学習する。栄養と健康、食文化、調理科学、食環境問題や食育など身近な食から世界の食まで様々なトピックを知り、自身の食事を振りかえり、食と人や環境とのかかわりを理解することで、自身の「食を楽しむ」ことについて考える。	
	眼の神秘	外界の情報の80％は眼から得ている。眼の不思議な役割を紹介し、眼はコミュニケーションにおいても重要な役割を担っていることを理解するとともに、保健・医療・福祉専門職のケアコミュニケーションに大きく関わることを学ぶ。本科目で取りあげる内容は、眼の構造、見える仕組み、視力の発達、３Ｄの世界、加齢と眼、コンタクトレンズ・メガネ等であり、五感の中での視覚情報がQOLに大きく関わることを理解する。さらに錯視や視覚認知の実験を体験することで視覚に関連する身近な現象に興味・関心を持つことを目標とする。	
	義肢装具の世界	義肢（義手・義足）とは事故や病気などで手足を失った場合に用いられる人工の手足で、義手には外見に優れた装飾義手や、日常生活での動作を再現する能動義手があり、近年では筋電義手も処方されている。義足には様々な継手部品が用いられており、それらの機能は膝や足首の動きに替わるもので、最新のテクノロジーが詰め込まれている。装具は腕や脚、体幹の機能に問題が生じた場合に処方され、腰用コルセットや膝サポーターなどがある。講義では義肢装具の最新技術や疾患との関連性、支給に関する法制度について紹介する。	
	新潟学	本科目では、新潟県の民俗事例を取りあげ、民俗学の基本的な事項を理解するとともに、その事例の持つ意義について考える。講義内容は、民俗学の特質・方法等について基本的な講義を行った後、新潟県内の年中行事や祭り、生業などにみる具体的な民俗事例を取りあげ解説する。新潟県には海、山、川、平野、湖などがあり、人びとのさまざまな暮らしが展開されている。新潟の歴史や風土、ゆかりのある人物の伝記などを学ぶことによって、本学が立地する新潟という地域のことを深く知り、親近感を持てるようにする。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
保健医療福祉教養科目群	国際保健の世界	今日、世界には保健医療資源の不足、貧困問題、環境問題、教育問題、地域での紛争や国家間の戦争、エネルギー資源問題など、数多くの問題があり、人々の健康に深刻な影響を及ぼしている。本学が国際保健の分野で世界の人々の健康を守る有為な人材を育成していくことは社会的使命であると考えられる。学生は、世界と我が国の国際保健協力の現状と課題、国際保健活動を実施する際の要件、保健医療分野における実際の活動と問題点、などについて学び、国際保健活動を実践するための基本的事項を身につける。	
	国民の生活と健康を支える仕組み	国民の生活を支えている社会保障制度の仕組み、ならびに我が国の社会保障制度（医療保険、高齢者医療等、介護保険、年金保険等）について講義を行う。各学習を通じて、これらを繋ぐ保健・医療・福祉の連携の視点についても考察し、主な社会保障制度についての理解を図る。日本の社会保障制度について理解するとともに、我々の生活や健康を支える仕組みについて知り、保健・医療・福祉を担う専門職として関心を高めることを目的とする。	
	現代社会と経済	経済学は生活に密着した必須の知識体系でもある。本科目では、現代における社会・経済問題を理解するための基礎概念について学ぶ。社会の中でお金はどのような役割を持ち、どのように流れているのかを知り、また、我々がそれにどのように関わっているのかを考えることで、社会の仕組みを経済学的な側面から理解する。暮しに必要なお金・家計支出の動向を具体的に考えることから始め、家計や企業、国家の活動や役割、具体的な産業の動態およびそのグローバルレベルでの繋がりを描くことで、新たな時代における人々の暮らしの展望を考える。	
	法学Ⅰ	社会規範としての法の諸特徴を、他の社会規範と比較しつつ明らかにし、社会生活において法の果たしている役割について理解する。日本の国法体系を把握し、その中での憲法の位置・性格について理解し、身近な例を通して日本国憲法の内容の理解を深める。日本国憲法（主として統治機構分野）の基礎知識・考え方について、具体的事例を踏まえて学習する。本科目では、統治機構分野（国会・内閣・裁判所、財政、地方自治等）および人権分野の一部（人身の自由、参政権、国務請求権）を取り扱う。	
	法学Ⅱ	本科目は「法学Ⅰ」の学修に続き、法・法律一般に関して概略を説明するとともに、日本国憲法（主として人権分野）の基礎知識・考え方について、具体的事例を踏まえて学習する。具体的には、基本的人権、包括的基本権と法の下の平等、精神的自由権、経済的自由権、社会権を取り扱う。憲法の基礎知識・考え方を理解し、社会における法的事象への関心を高めること、基礎知識・考え方の理解を前提とした論理的思考力を習得することを目的とする。	
	臨床の哲学	医療・福祉・教育・スポーツは人々の生活や文化のあり方に関係深い領域である。こうした領域においては、多角的な視点で物ごとを捉えてさまざまな解決方法を見出すことが求められる。そこで、この講義では、多様性を受け入れるためのグローバルな思考を身につけることを目的とする。現象を洞察し、事象の背後に隠れている事柄に目を向け、物事を掘り下げて考えることのできる力を育む。また、臨床や研究に必要な問いを自らたてることのできる能力も身につける。	
	臨床技術の世界	臨床技術学とは、臨床工学と臨床検査学を融合した学問であり「種々の生体情報から患者状態を的確に把握し、チーム医療の中で適切な治療を実施するための学問」と位置付けている。本科目では、日々検査や治療技術が進化・高度化している臨床技術で扱う検体検査、生理学的検査の概要と現状および代表的な治療装置である血液浄化装置、人工呼吸器、人工心肺等の概要を学び新しい学問領域について理解し、医療における臨床技術(臨床工学・臨床検査学)の知識を深める。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	留学の魅力	海外で生活した経験のある教員から、滞在先の国の文化や伝統について学ぶ。留学の意義や魅力について具体的に学ぶとともに海外に対する学生の興味や関心、意欲を高める。将来の留学の可能性について考える契機を設ける。ドイツ、フランスなどのヨーロッパ地域に加えて中東イスラム、中央アジアなどの文化や留学の魅力などについても取り上げ、授業ごとのテーマの国や地域について文献調査を学生に取り組ませる。	
	シティズンシップ教育入門	本授業の目的は、現代社会を生きる上で大切な市民性や地域づくりに関わる基本的な理解を深めることである。具体的には、①これまでとは異なる新たな視点を手に入れ、地域をみることができるようになること、②自分の身近にある「みんなの問題」に関わりを持とうとする意識や態度を身につけること、③現在、そして将来に自分や周囲が問題に直面した際に、他者と共に主体的に行動し、解決に導くための力を獲得することである。 本授業では、地域についての理解を深め、地域の中にある課題や資源を認識し、それらをとおして地域が抱える課題に対する解決方法を検討していく。また、授業は、教員からの講義、個人とグループで構成し、地域と様々な分野・領域を掛け合わせた形式で展開する。	
	放射線の基礎と人体への影響	放射線とは何か、放射線の種類と性質から始まり、放射線が医療および工業にどのように利用されているのか、人体への影響はどのようなものがあるかなどを科学的な視点で学ぶ。また、福島第一原子力発電所の事故に関連した放射線の影響、特に人体、環境、植物などへの影響についても概説する。さらに、これらを通して放射線に関する科学的な知識を学ぶとともに、放射線が環境中の化学物質と同様に環境問題であることから、報道やその他ニュースなどの情報を利用し適切な判断を導くことを学ぶ。	
	新潟水俣病の理解	新潟水俣病が発生した阿賀野川の流域に位置する本学で学ぶ学生として、また、保健、医療、福祉、スポーツ分野の専門職となるために新潟水俣病のあらましや問題等を学ぶ意義は極めて深い。新潟水俣病の問題に携わってきた当事者や支援者などの関係者、新潟水俣病の学習・研究を行ってきた上級生や教員からの話を聞くことで、水俣病の症状の多様性や差別・偏見の構造などへの理解を深める。また、若い世代がそれを語り継ぐことの意義を理解し、継続して新潟水俣病の問題に関心をよせ、情報発信をする担い手となる意識を高める。	
	統計入門	社会において、また、医療・福祉の現場でも、多くの情報を取り扱っています。情報を正確に読み、伝え、有効に活用するのが統計の目的です。講義では具体的なデータを用いながら、客観的なものの見方、根拠のある説明、議論の方法である統計の基本について知識を修得し、問題解決の手法として理解します。学習は代表値と散布度、相関と回帰、度数分布とヒストグラム、母平均の検定、平均値の差の検定、ノンパラメトリック検定について、コンピュータを活用しながら理解します。	
	一次救命処置法	一次救命処置は、心肺蘇生、AED(自動体外式除細動器)の使用、気道異物除去法、ファーストエイドで構成されている。一次救命処置は国民全てが行なえることが望ましく、現在では初等教育にも取り入れられている。しかし、その普及は十分とは言い難いのが現実である。医療職を目指す者であれば、専門を問わず一次救命処置についての知識と技術を修得しておくことは、必須事項である。本科目では、保健・医療・福祉・スポーツの専門職に求められる一次救命処置の知識と技術について学修する。	
	東洋医学的養生	養生とは、病気になる前に健康の維持・増進を心がけることであり、東洋医学ではこの「病気になる前」の状態のことを“未病”と言う。古代の医学書でも、この未病の段階で病気にならないようにする「養生」が医療において最も重要だとされている。本科目では、これからの時代における養生の重要性と発病には至らないものの軽い症状がある状態で、五臓六腑がつながっているという東洋医学の考え方から、軽いうちに異常を見つけて病気を予防するという養生、未病治について学ぶ。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	自然人類学概論	医療従事者として必要な基礎的な人体構造・機能の理解を深めるため、人類進化の流れをつかみ、どのようにしてヒトは現在ある姿になったのかを概説し、本学学生の持つべき素養の一つとして、基礎医学の基本となる解剖学の一分野として理解を深める。授業内容は、①霊長類とは何か、②ヒトの定義、③初期人類の特徴、④Homo属への進化、⑤Homo sapiensの誕生と拡散について主に解説して、ヒトの成り立ちについて考える。	
	データサイエンス概論	情報通信技術等の発達により、データが溢れるようなビッグデータの時代となった。この新しい技術の進歩により、新たなサービスが生まれ、日々変化している。この中で、データを処理・分析し、データから有用な情報を取り出す方法であるデータサイエンスの需要性が認識されるようになった。そこで、本科目では、統計学と情報学を基礎として、これらの分野を融合的に扱い、データサイエンスのリテラシーレベルの内容を学ぶ。具体的には社会におけるデータ・AIの利活用例、データを読み、説明するデータリテラシー、データ・AI利活用における留意事項を学ぶ。	
	比較認知科学の世界	私たちヒトでは情報を処理する、何かを考える、という「心」のはたらきが存在するように見えるが、ヒト以外の動物はどうだろうか。ヒトのように考える動物は存在しないのだろうか、あるいは、賢いと思われる動物ならば思考活動を行っているのだろうか。比較認知科学とは、このような疑問に対し、動物間の比較を通して様々な方法を用いて取り組んできた学際的分野を指している。しかし、かつてはヒトとヒト以外の動物を比較することすら、当たり前のことではなかった。本講義では、動物の心や精神活動に対する見方がどのように変遷し、比較の視点をもった研究が成立するようになったか、きっかけとなった事例を基に概観していく。比較認知科学の背景にある考え方を理解し、事例を用いて説明できるようになることを目標とする。	
	アカデミック・ライティング	本学では、卒業研究を必修科目に位置づけている。「アカデミック・ライテング」は、卒業研究の執筆の第一歩の科目である。受講生は、高等学校卒業までの間、小論文や感想文を何度も執筆したことがあるに違いない。しかしながら、卒業研究には、小論文の執筆とは異なった特徴がある。つまり、卒業研究は、どれほど稚拙であっても、課題を具体的に記述して、先行研究を批判的に論じ、課題解決（あるいは、解決の糸口を提起）を論理的に読者に伝えなければならないのである。このとき、卒業研究の執筆には厳格な形式が定められている。「アカデミック・ライテング」では、こういったことを学修することによって、卒業研究の執筆に滑らかな接続を目的としている。なお、この科目は、前の時間の授業内容の学修を前提として、次の時間の授業が展開される。	
	連携基礎ゼミ	1年次前期に履修した「基礎ゼミ」は同一学科内の学生により実施されたが、本科目では、他学科の学生とともに保健医療福祉に関連したテーマを調査する。2年次前期までに学んだ学生各自の専門職について概略説明することを通して、お互いが他職種を学び、日本語のオーラルコミュニケーションの技術向上を図る。加えて、ゼミで研究テーマを決め、これに沿った活動を実践することにより、チームワークの重要性や他職種間と協働することの大切さを実践的に学ぶ。	
	チームアプローチ入門	本学は保健・医療・福祉・スポーツの総合大学として、多様な専門職を養成している。保健・医療・福祉の現場においては、各専門職にはそれぞれが果たすべき役割があるとともに、異なる専門職間の連携が不可欠となっている。このような背景から、本学の連携教育における入門科目と位置づけ、チームアプローチにおける各専門職の役割やその必要性と現状について学ぶ。チームアプローチについての基礎知識を修得し、連携教育を学ぶ土台とする。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
保健医療福祉連携科目群	保健医療福祉連携学	私たちの身近な生活周辺から相互に助け合う連携やその枠組みについて学び、さらに保健、医療、福祉の専門職にあっての連携に関わる知識、技法、制度等について理解を深める。特に、医療現場、小児や高齢者などの福祉現場、地域や保健の現場で行われている専門職連携について、現場の声や事例を通してその実際を学ぶ。他職種とともに対象者の課題解決について討議する中で、自らの専門性を深めることを目的とする。	
	地域連携学	地域完結型の医療への転換が進んでいるという社会背景を受け、実際に施設ではどのように関係機関の連携を構築し、地域連携の実践が行われているかを理解する。将来、保健・医療・福祉の専門職として働く中で、地域内の各施設と連携を図るにあたり、自身がどのような役割を果たしていく必要があるのかを想起できることを目的とする。 また、地域包括ケアシステムの概念を理解し、多職種協働による地域に向けた保健医療福祉専門職の活動について見学やグループワークを通して学ぶ。	
	連携総合ゼミ	本学の理念である「QOLサポーターの育成」へ向けての自覚・役割を踏まえ、対象者を中心として働き合う各職種の専門的連携（チームワーク）のあり方を中心に、全学科学生の混成チーム体制で学修する。本科目では、具体的な対象者の事例を取り扱う。学生が自らの所属学科の専門性を踏まえつつ、他学科の専門性・志向性を十分に理解し、評価・アセスメントから支援計画の立案に至るチームケア、チーム医療を模擬的に体験することで、他の専門職と連携して対象者の支援にあたるための方法や内容を修得することを目的とする。	
	社会連携実践演習Ⅰ	本学の理念である保健・医療・福祉・スポーツ分野における優れたQOLサポーターとしての資質を高めるために、地域における様々な活動に参画し、対象者を支援することで社会と連携し、専門職としての基礎的な対象者支援スキルを実践的に身に着けることを学修の目的とする。本科目では、地域における小・中・高等の学修およびスポーツ支援、健康増進支援、環境整備支援、高齢者支援、コミュニティ等のイベント支援等の様々な活動に参画し、社会連携活動に理解を深める。	
	社会連携実践演習Ⅱ	本学の理念である保健・医療・福祉・スポーツ分野における優れたQOLサポーターとしての資質を高めるために、地域における様々な活動に参画し、対象者を支援することで社会と連携し、専門職としての基礎的な対象者支援スキルを実践的に身に着けることを学修の目的とする。本科目では、地域における小・中・高等の学修およびスポーツ支援、健康増進支援、環境整備支援、高齢者支援、コミュニティ等のイベント支援等の様々な活動に参画し、社会連携活動に理解を深める。Ⅰとは異なる施設の活動に参画する。	
	心理学概論Ⅰ	個人行動から集団レベルにいたるまで、自己と他者を理解するための基礎的な法則とその応用についての知見を学ぶことを目的とする。 （オムニバス方式／全15回） （2 坂田省吾／8回） 「人間とは何か」、「心のしくみ」について基礎的知見を実生活との関連、応用の面から講義する。社会心理学の知見を取り上げて個人行動から集団レベルにいたるまで、人の心的活動の基本的な法則とその応用についての知見を学ぶことを目的とする。 （4 山﨑由美子／7回） 人の発達を通して、人の心や行動のあり方、問題について考えていく。 主として、発達心理学、パーソナリティ心理学の知見を取り上げて、人の心的活動の基本的な法則とその応用についての知見を学ぶことを目的とする。	オムニバス

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	心理学概論Ⅱ	個人行動から集団レベルにいたるまで、自己と他者を理解するための基礎的な法則とその応用についての知見を学ぶことを目的とする。 （オムニバス方式／全15回） （2 坂田省吾／8回） 「人間とは何か」、「心のしくみ」について基礎的知見を実生活との関連、応用の面から講義する。社会心理学の知見を取り上げて個人行動から集団レベルにいたるまで、人の心的活動の基本的な法則とその応用についての知見を学ぶことを目的とする。 （4 山﨑由美子／7回） 人の発達を通して、人の心や行動のあり方、問題について考えていく。 主として、発達心理学、パーソナリティ心理学の知見を取り上げて、人の心的活動の基本的な法則とその応用についての知見を学ぶことを目的とする。	オムニバス
	臨床心理学概論	臨床心理学は、心身の不調や環境への不適応に悩む人々に対して、主として心理学的な知識と方法によって支援し、人々の心の成熟と癒しに役立とうとする実践的な学問であり、臨床現場と深く関わっており、臨床現場からその理論がたえず問い直され発展を遂げてきた。本授業では、臨床心理学の成り立ちと基本概念および代表的な理論について学び、臨床心理学に対する基礎的な理解を深めていく。具体的には、精神分析学と力動的心理療法、行動理論と行動療法、認知理論と認知行動療法、人間性心理学とクライエント中心療法、といった心理療法の諸理論についての基礎的な知識を身につけていく。また、心理的アセスメントの理論と方法と実施にあたっての留意点、ケースフォーミュレーションと心の病理についての認識を深めていく。さらに、心身の不調や環境への不適応に対して、どのような治療や支援があるのかについても必要な知識を身につけていくことを目指す。	
	運動心理学概論	運動心理学とは、人の身体運動を心理学の観点からとらえるものであり、運動の発達や制御・学習からスポーツスキルの獲得、健康のための身体運動やスポーツ参加・継続への動機づけ、スポーツとパーソナリティ形成、競技スポーツにおける心理臨床など、幅広い分野がある。これらの諸分野から、身体や運動を心理学的に理解するとはどういうことかを考えることを目的とする。日常での何気ない動きの仕組みを知り、自らの可能性に気づくことを目指す。	
	心理学研究法Ⅰ	心を科学的に研究するための実証的手法を、系統的に紹介する。それぞれの研究方法の成り立ち、意義まで説明し、各研究方法の利点や限界点を理解することを目的とする。研究方法の正しい理解は、研究結果を正しく解釈するためにも、自分で研究するためにも必須の心理学の基礎であり、目的に応じて様々な手法を使い分けて、実際の研究に応用できるようになることを目指す。心理学における研究倫理問題も取り上げる。心理学研究法Iでは心を評価するための測定法の発達や変遷についての歴史的経緯を知り、基本的な考え方について学ぶ。	
	心理学研究法Ⅱ	心を科学的に研究するための実証的手法を、系統的に紹介する。それぞれの研究方法の成り立ち、意義まで説明し、各研究方法の利点や限界点を理解することを目的とする。研究方法の正しい理解は、研究結果を正しく解釈するためにも、自分で研究するためにも必須の心理学の基礎であり、目的に応じて様々な手法を使い分けて、実際の研究に応用できるようになることを目指す。心理学における研究倫理問題も取り上げる。心理学研究法IIでは、各研究分野で用いられる実験、観察、調査、検査、面接などの方法について、実際の事例を通して理解し、実践できるようになることを目指す。 (オムニバス方式/全15回) （7 橋本照男／7回）　実験法、調査法を理解し、実践できるようになる。 （10 領家 梨恵／8回）　観察法、検査法、面接法に加え、介入研究やメタ分析、研究倫理について学ぶ。	オムニバス

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	心理学統計法Ⅰ	心理学は「心」という目で見ることのできないもの構成概念を仮定して、科学的にアプローチする学問である。そのために行うのが心理測定、つまり一定のルールに従って心にかかわる様々な構成概念を数値化する手続きが必要となる。データの記述と可視化、因果関係と相関、推測、推測に基づく判断など基本的な事項について、高校数学での「データの分析」、「統計的な推測」を発展させた形で学習する。受講者自身が心理学的データを分析できるようになることを目指す。	
	心理学統計法Ⅱ	心理学的研究で用いる実用的な統計法について、それらの原理や考え方を理解することを重視し、適切な統計解析法を選択して分析ができるようになることを目的とする。特に分散分析を使いこなせるようになることを目指す。また、収集したデータの分析手続きだけでなく、適用上の留意点についても学ぶ。因子分析、重回帰分析、共分散構造分析（構造方程式モデリング）、多変量解析についても概観し、テスト理論とメタ分析についても解説を行う。 (オムニバス方式/全15回) （10 領家　梨恵／7回）１要因と２要因の分散分析、その結果の下位検定、多重比較についても理解し、それらを正しく適用して解析結果を算出し、表記できるようにする。χ二乗検定、順位検定も理解して、使用できるようにする。 （7 橋本照男／8回）心理学研究で用いられる多変量解析について学び、それらを使用する目的を理解し、どのようなデータにどの解析を適応すべきなのかを修得する。	オムニバス
	心理学基礎実験	人間行動を理解するための実験的方法、データ収集の方法、及びデータをもとにした科学的論述方法について基本となるところを実習する。実験者および参加者として実験へ参加することにより体験的に学習する。ミュラー・リヤー錯視を用いた精神物理学的測定法や、語の記銘を用いた記憶の実験、ストループ課題や心的回転課題を用いた認知の実験等を体験しレポートにまとめる力をつける。個別学問体系に関する多様な情報源から必要な文献資料やデータを収集・解析する能力・技能を訓練し、課題の考察のために必要な理論・方法を特定する能力・技能を身に付けることを目指す。自らの研究成果をレポートや論文にまとめ、ゼミや研究会等で発表し、質問などにも回答できる能力・技能を獲得するようにする。	共同
	心理学実験	人間行動を実験的に解明するための実験的手法や技術について、実習する。また、人間行動を実証的に解明するための調査的手法や技術を学ぶ。グループ単位で具体的に研究テーマを決めて質問紙調査を実施することによって、質問紙調査を用いた研究の立案から研究成果のプレゼンテーションに至る一連の過程も学ぶ。　個別学問体系に関する多様な情報源から必要な文献資料やデータを収集・解析する能力・技能を訓練して課題の考察のために必要な理論・方法を特定する能力・技能を養う。また、自らの研究成果をレポートや論文にまとめ、ゼミや研究会等で発表し、質問などにも回答できる能力・技能の獲得を目標とする。	共同
	比較認知科学	自然科学の枠組みを踏み外さずに、動物たちの認知の世界を探ることによって、人間の心のより深い理解をめざすことがこの講義の狙いである。生物行動の基本原理である古典的条件づけとオペラント条件づけを学び、軟体動物からヒトまでの神経系、脳と行動の視点から人間行動の理解を深めることを目的とする。実験から得られた結果に基づいて組み上げられた生物心理学について講義する。　動物の学習を通して人間を考える目を養う。ヒトのものの見方、考え方が理解できるようになる。自分と他人のものの見方が比較できるようになることを目指す。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門基礎科目群	記憶の科学	人間にとって記憶と学習はとても重要な機能である。この授業では神経科学の入門的な内容とともに、主に記憶や視覚認知をテーマにしたトピックスを通して、記憶のメカニズムについて神経科学からの見方を含めて講義する。記憶の分類から記憶障害、記憶に重要な記銘メカニズムのみならず、幼児健忘、前向健忘、逆向健忘等の忘却との関連でも講義をする。忘れることのできない記憶は時にはPTSDも引き起こす。記憶について現在までにわかっている大きな枠組みから、研究を通して想定されている脳内メカニズムまで広く講義をする。	
	ストレスと脳	初学者向けに、日常的に使われる「ストレス」という言葉の歴史と定義から解説を行い、ストレスと脳の関係について概観する。動物を用いた研究から人の基礎的研究について講義を行う。心と体の仕組みを理解し、ストレスの生物学的メカニズムを学ぶことを目的とする。そして、それらの知見から得られたストレス関連疾患の治療方法と治療機序を概観する。講義にビデオ等のマルチメディアを用いたり、ストレス反応を調整する手法を実際に行ったりすることで講義内容の理解を深める。	
	脳とこころ	これまでの認知神経科学(Cognitive Neuroscience)の知見をわかりやすく紹介する。認知神経科学とは、脳がどのように心を有効に働かせているか研究する、比較的新しい研究分野で、行動、思考、感情などと脳との関係を理解することを目的とする。脳の解剖の脳機能の計測法から、発達、可塑性と学習、視覚的注意、感覚・知覚、運動と行為、記憶、言語と思考、社会性、情動、などが脳機能計測によって明らかにされてきた例を紹介する。	
	心理プログラミング	心理学では、実験や調査などで大量の数値データを扱うことが多い。そのため、数値データの処理を行う際に、プログラミングができることが望ましい。授業では、Excelで扱えるVisual Basicでプログラミングの基礎を学ぶ。さらに、さまざまな統計処理とグラフを書くことができるR言語のプログラミングについてRStudio Cloudを用いて学ぶ。受講者自身のデータを分析できるようになることを目的とする。なお、受講者自身のPCでプログラミングを行うため。自身のPCが必須となる。	
	精神医学	代表的な精神疾患やその治療法を基礎知識とした上で、精神科の医療および福祉の現場において、具体的にどのような治療や支援が求められ、実践されているのかについて紹介する。特にアディクションや児童思春期、医療観察法による医療など、専門性が高く敷居が高いと思われがちな領域について取り上げる。また、精神医学の歴史と社会・文化との関係についてや、精神医学の立場から日常生活上のさまざまな事象を考察するなど、医療・福祉の枠をこえて精神医学を理解できるような講義を行う。	
	メンタルトレーニング	スポーツ選手が練習に意欲的に取り組んだり、試合場面で実力を発揮するために行っているのがメンタルトレーニングである。メンタルトレーニングの目的は、自己への気づきを高め、自らが自分自身の心をコントロールできるようになることである。そのため、心理検査や毎日の振り返りによって気づきを高め、呼吸法や自律訓練法、認知の再構成などで自分自身をコントロールする方法を習得することを目的とする。理論的背景に関する講義だけでなく、実習形式の授業も含め、受講者自身が実践できることを目指す。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	スポーツ心理臨床	スポーツ心理臨床が、心理学の歴史のなかでどのように位置付けられ、どのように発展してきたかを明らかにする。そのうえで、スポーツ心理学との違いを検討する。 (オムニバス方式/全15回) （11 千葉陽子／8回） スポーツ心理臨床の全体像を把握し、その対象および諸理論を理解するとともに、アスリートの心の特徴を検討する。また、カレッジスポーツの課題を通して、これからのカレッジスポーツのあり方、アスリートのキャリアトラジションを検討する。グループ箱庭の理論と実践を通して、チームビルディングについて体験的に理解する。 （51 山崎史恵／4回） メンタルトレーニングの心理臨床的なアプローチ、メンタルトレーニングとカウンセリングの連携、アスリートのパフォーマンスにみる内的課題、ジュニア期のアスリートの課題と対応について検討する。 （11 千葉陽子、51 山崎史恵／3回）（共同） スポーツカウンセリングの相談事例について理解するとともに、個人・チームにおいてアスリートを取り巻く関係者（指導者、トレーナー、保護者等）との関わりを検討する。	オムニバス 共同（一部）
	コーチングの心理	コーチングは実践応用領域として捉えることができる。コーチングにかかわる心理的要因、その技法、効果的な指導法について検討する。 (オムニバス方式/全15回) （11 千葉陽子／10回） コーチに求められる基本的態度、コーチングスキル、コーチングの種々のモデル、ソクラテス質問とSMARTゴール、コーチングにおけるアセスメントの必要性とその具体的方法、背景理論や技法を理解し、発達段階、性別に応じたコーチングを検討する。また、体罰問題や医療場面、教育場面、キャリア支援場面におけるコーチングの応用を検討する。 （1 山本裕二／5回） 動機づけの構成要素、動機づけを高める方法を理解し、情報処理としての運動制御、運動における感覚・知覚・注意の役割の視点から効果的な指導法、運動の効果的な示範とフィードバック、ダイナミクスの視点から対人・集団運動の効果的な指導法について検討する。	オムニバス
	スポーツ心理学	人の身体活動全般、例えば運動遊び、学校体育・競技スポーツ・レジャー・健康スポーツなど、幅広い年代において実践される運動・スポーツ活動についての心理学的な基礎知識および理論を学ぶ。授業では、運動・スポーツが人々の心身に及ぼす影響、指導の際の留意点、心の働きと運動パフォーマンスとの関係など、運動・スポーツを取り巻く身近な経験を心理学的な枠組みから捉えなおすことを目指す。本授業はメディア授業（オンデマンド型）を中心に一部対面にて実施する。	
	競技スポーツの心理学	競技レベルが上がるにつれ、アスリートの体力や技術面の違いは僅差となり、勝敗やパフォーマンス発揮の優劣は心理的要因によって左右される場面が増える。本授業では、競技力向上や実力発揮のための心理的アセスメント、心理的スキル（スポーツメンタルトレーニング）、心理的コンディショニングに関連した理論と実践法を学ぶ。また、指導者のメンタルマネジメントの重要性に触れ、指導に伴うストレスの認識およびその対処法についても理解を深める。これにより、競技スポーツ関係者のストレスや心理的課題に対して、適切なマネジメントあるいは教育的な支援ができるようになることを目指す。	
	スポーツカウンセリング	アスリートの相談に応じるための基本的な知識や心構えを学ぶとともに、スポーツカウンセリングの意義と独自性を理解する。授業では、スポーツカウンセリングに特徴的かつ頻発しやすいテーマ・トピック・事例等を取り上げ、実際のアスリートとの面接をイメージできる資料やトランスクリプト（会話のやり取り）を紹介しながら、具体的・実践的な理解を目指す。また、振り返りやディスカッションの時間を設けて、スポーツ領域におけるカウンセリングのあり方や心理的変容の様子を考察し、相談対応の力量を高める。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	アダプテッドスポーツ論	心身に障害をもつ人や、高齢者・子供などが参加・競技できるように、ルールや用具などを適合させたアダプテッドスポーツの役割を学習する。「障害とは何か」を多面的に捉え、わが国の障害者スポーツの黎明期から現在のパラスポーツまでの歴史を概観し、障害者とスポーツの歩みを理解する。また、高齢者・子供などが参加・競技できるように、ルールや用具などを適合する方法を事例を通して学ぶ。多様なスポーツ実践を支援・普及できるようになることを目指す。	
	社会福祉概論	社会福祉の実践や政策を支える思想が、歴史的にどのように形成されて今日に至っているかを理解するために、国内外の先人たちの取り組みや足跡をたどりながら、それぞれの先駆性とその当時の社会的背景を学ぶ。そして、国内外の社会福祉分野のパイオニアが取り組んだ事業や活動の特徴と社会的背景を学び、社会福祉の実践や政策を支える思想が、歴史的にどのように形成されて今日に至ったかを説明できるようになることを授業の目的とする。	
	精神保健学	精神面での保健（こころの健康）を体系的にとらえ、精神保健の基礎となる概念や理論を学ぶとともに、現代の日本社会で起きているこころの健康をめぐる様々な問題やそれについての対策、予防策などを幅広く学ぶ。昨今の社会経済情勢の著しい変化や少子高齢社会を背景として日本社会が大きく転換していくなかで、精神の健康に関する様々な問題が生じてきている。心理や福祉の専門職をめざす者にとって、現代人が抱えるこころの問題を避けて通ることはできない。本授業では、福祉現場で働く際に必要な精神保健に関する基礎的知識の習得に加え、精神保健の視点から物事を捉える力量を育み、心理や福祉の専門職としての実践力の向上を図ることを授業の目的とする。	
	介護概論	少子高齢社会を迎えている日本において、多方面から介護の重要性、必要性がいわれている。また一方で、介護を担う人材が不足していることも事実である。現在の社会情勢の中で、介護支援の質と量のが求められている。このような背景を踏まえて、「介護」とは何かを考える。それぞれが介護の意義を見出し価値を模索しつつ、介護福祉の知識・技術・倫理を理解する。授業は、介護問題の歴史と現状の理解、保健・医療・福祉の連携の中で介護福祉の担う役割を知る。また介護支援に必要な基本的知識を学び、人間の尊厳を支える介護、その人らしさや自立を支援する介護について理解する。学習目標は、⑴社会の動向とともに、現代社会の介護についての理解ができる、⑵介護を必要とする人を理解する、⑶基礎的な介護支援を習得し自立を支援する介護への理解を深める、⑷多職種連携（チームケア）の重要性が理解の４つである。	
	高齢者福祉論Ⅰ	老化に伴う変化と影響を理解した上で、高齢者の生活課題と高齢者福祉の沿革を多方面から学ぶ。また、人間の成長と発達の過程における身体的・心理的・社会的変化及び老化が生活に及ぼす影響の理解を踏まえて、高齢者の生活課題について理解する。これらの学びをとおして、高齢者の身体機能面・精神心理面・社会環境面を総合的に理解するとともに、高齢者福祉の沿革の概要を把握する。具体的な学習の内容としては、高齢者の定義と特性、高齢者の生活実態とこれを取り巻く社会環境、人間の成長と発達の基礎的理解、高齢者の身体的理解（身体機能の変化と特徴的な疾病）・心理的理解（精神機能の変化と認知症）、・社会的理解（家族関係、社会関係、社会参加、生きがい）、高齢者福祉の歴史、高齢者の介護・福祉需要、などである。これらの学習から、高齢者支援の総合的な理解をより深める。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	高齢者福祉論Ⅱ	高齢者に関する福祉制度等を理解するとともに、高齢者福祉関係法制度を基盤とした高齢者支援の具体的な内容を学ぶ。また、高齢者の特徴に応じた生活の支援に関する知識を習得する。これらをとおして、高齢者に関するさまざまな制度と併せて、高齢者支援の実践的な知識・技術を理解する。具体的な内容としては、高齢者に対する法制度（介護保険法、老人福祉法、高齢者の医療に関する法律、高齢者虐待防止法など）、介護の概念と範囲及び対象、介護予防と自立支援、高齢者と家族等の支援における関係機関と専門職の役割、高齢者虐待の対応、認知症ケア、終末期ケアなどである。最終的には、専門職として習得すべき高齢者支援と家族等に対する支援の実際に関する本質的理解を深める。	
	児童家庭福祉論Ⅰ	グローバリゼーションとICT化に揉まれつつ、わが国では少子高齢化及び低経済成長率の長期化並びに労働市場の二極化が進んだ。社会の変化は子どもと子育て家庭にも及び、児童虐待等の問題として表出した。しかし、子どもは「その人格の完全なかつ調和のとれた発達のため、家庭環境の下で幸福、愛情及び理解のある雰囲気の中で成長すべきである」（子どもの権利条約前文）。改めて、子どもは大人とは異なる、特有の人権及び権利の主体であることを認識しなければならない。さらに、社会福祉士は子どもと家庭について十分な知識を持ち、支援対象者の背景としての家族を理解する必要がある。児童家庭福祉論Ⅰでは、 子どもに関する概念を整理した上で、児童家庭福祉の理念及び歴史並びに現代の子どもと家庭を取り巻く社会状況及び児童家庭福祉サービスにおけるニーズについて理解を深める。加えて、児童福祉法と関連する政策の動向について学ぶ。	
	児童家庭福祉論Ⅱ	児童家庭福祉論Ⅰで学んだ子どもの人権及び権利保障と社会情勢及び国の政策動向に関する知識を基礎として、児童福祉関連法令を精緻に読みながら、具体的な支援制度と関連するサービスについて体系的に学ぶ。環境や地域社会とのつながりを視野に入れた子ども・子育て支援サービス及び青少年の健全育成の実態、義務教育及び高等学校教育におけるいじめや不登校の実態とスクールソーシャルワーカーによる支援、子どもの貧困とひとり親世帯の現状と支援、配偶者からの暴力の実態と防止策及び被害者支援の、児童虐待の実態と児童相談所による介入及び支援並びに市町村を含めた虐待予防の取り組み等を具体的に学ぶ。事例検討により、表層的な制度理解にとどまらず、援助の実際を知り、将来を担うすべての子どもの健やかな成長を支える視点を内在化する。	
	障害者福祉論Ⅰ	障害者を取り巻く現状と課題、障害者福祉に関する法制度等について学び、障害者保健福祉施策を体系的に理解することを学習目標とする。具体的には、障害者福祉の歴史的展開と基本理念の変遷を学習し、今日的な障害（者）の概念及び障害者の生活実態と家族等への支援の方策を学ぶとともに、障害に関連する諸分野（福祉、医療、教育、国際社会等）の制度や支援策等についても学び、社会福祉専門職としての視野を広げる。本授業では、これらの観点から問題解決のための実践的知識の習得を目指し、幅広い視点から物事を捉えることのできる社会福祉及び介護福祉の専門職の育成を目的とする。	
	障害者福祉論Ⅱ	障害者を支援する専門職の役割と連携のあり方を学ぶとともに、障害者の就労の実態と就労支援施策の現状等について体系的・総合的に理解することを学習目標とする。具体的には、障害者の就労支援の歴史的変遷を学習し、障害者の就労実態と支援の方策について学ぶとともに、障害者の就労に関連する法制度や多職種専門職の役割等についても学び、障害者の自立と社会経済活動への参加の促進を図るために必要な支援内容について幅広く学習する。本授業では、多職種間の連携や就労支援分野との協働のあり方等に関して幅広い視点から学び、実践的な支援を行う社会福祉及び介護福祉の専門職の育成を目的とする。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	感覚・知覚心理学	心の基本的メカニズムを理解するための基礎的な心理学科目である。感覚機能および知覚能力についての基礎的な理論と実験的な研究手法について学び、人間が環境からどのように情報を取り入れ、処理しているかを科学的に理解することを目的とする。一つ目に、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚について学び、心理物理学関連である閾値と順応について学ぶ。これにより人の感覚の機序を概説できるようにする。二つ目に、錯視、音声コミュニケーション、共感覚・多感覚統合・クロスモーダル知覚、注意・意識、物体知覚・時間知覚について学ぶことで、人の知覚の機序について概説できるようにする。三つ目に、感覚や知覚の障害とそのアセスメントについて学ぶ。加えて感覚補助代行の方法論を概説する。これにより、感覚・知覚及びその障害に関する知見を公認心理師の実践に関連づけられるようにする。 (オムニバス方式/全15回) （2　坂田省吾/8回） 感覚・知覚心理学における感覚モダリティ、錯視、注意と意識、物体または顔の認知、時間知覚について講義する。 （10　領家梨恵/7回） 感覚・知覚心理学における心理物理、体性感覚、音声コミュニケーション、多感覚といった基礎と感覚・知覚の障害に関連する臨床領域について講義する。	オムニバス
	認知・言語心理学	この講義の目標は、認知心理学、言語心理学に関する基本的な知識を獲得させること、及び教授・学習過程や言語の獲得・使用の理解の基礎となる知識を獲得することを目的とする。心の仕組みや働きに関する標準的知識を身につけることを目指す。また、人を人たらしめているものとして言語の使用がある。人はどのように言語を獲得し使用するのか、言語の獲得については、一般の学習とは異なるメカニズムが関与している可能性がある。言語学習のメカニズムについて理解することは、教育方法や学習方法の改善、読字・書字障害や学習障害の支援に役立つ。言葉に固有の学習過程についても解説する。	
	学習心理学	心理学で「学習」とは、机の上で勉強することにより知識を得る過程だけでなく、日常における経験によってさまざまに変化した行動のことを指す。この講義の中では、心理学における学習の定義から始めて、様々な行動を分類・記述する方法と枠組みおよび経験を通して人の行動が変化する過程について学ぶ。そうして学習と行動に関する知見と現実の行動の問題を関連づけて考える力をつける。学習に関する知識を習得するために、講義形式の授業を中心としつつ、 映像資料等を用いて学習心理学に関する実験内容や結果について紹介していく。人間や動物の学習行動を規定している基本的な原理、行動が変化する過程と法則性を理解することを目的とする。	
	感情・人格心理学	感情がどのように生起するのか、人格がどのように形成されるかを理解することが本講義の目的となる。感情に関する理論と感情喚起の機序、感情が行動に及ぼす影響、人格の概念とその形成過程、人格の類型と特性、を説明できるようになることを目指す。感情と人格の研究について、それぞれの歴史と流れを概観し、用語の区別と理解、様々な理論とそれらの論争、認知や社会・文化との関係、個人差、測定方法、そして感情と人格の関連などを学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （7 橋本照男・72 那須里絵／4回）（共同） 感情と人格の両方に共通する点、相互に影響、関連がある点について学ぶ。 （7 橋本照男／4回）感情の機能や神経基盤について学ぶ。 （72 那須里絵／7回）人格、パーソナリティについて、その理論や測定法を、実際に検査を実施、体験しながら理解し、修得する。	オムニバス 共同（一部）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	神経心理学	神経心理学とは、脳に損傷や疾患が生じた後の高次機能の状態に関する学問であり、人の思考や行動の問題（症状）を、脳の機能やその障害に起因させて説明する分野である。脳の損傷によって示される様々な症状を知り、それらの原因を理解することを目的とする。損傷された脳領域の機能低下だけでなく、その損傷を代償しようとする働きや、損傷領域からの影響を受けていた別の領域の働きなど、脳全体の機能変化を捉える。特に、脳血管障害や外傷性脳損傷による高次脳機能の障害と必要な支援、リハビリテーションについて学ぶ。	
	進化・生理心理学	心理学は行動の科学であり、あらゆる行動には生理学的・神経学的変化が伴う。それゆえに、心理学を学ぶ上で行動の生理的基盤を理解することは必須と言える。また、それぞれの種の行動は、身体の構造と同様に、独自の進化の中で獲得されてきた。本講義では、行動に関係ある基礎的な神経科学的知識を身に着けた後、ヒトおよびヒト以外の動物の両方を対象として見いだされた、心理学的現象の生理学的基盤についての様々な知見について学ぶ。それらの現象が種の進化という長期的視野に立って見た時、どのような意味を持つのかについて学ぶ。	
	発達心理学	発達心理学に関する専門知識を、具体的な行動と体系的に関連づけて、俯瞰的に理解することが、この科目の目的である。この目的に達するために「発達とはなにか」「発達の生物的な基礎づけ（初期経験）」「発達の生理的な基礎づけ」「発達心理学の理論（フロイトの発達理論、〔道徳性の発達を含む〕認知発達理論、徹底的行動主義と社会的学習理論、生涯発達の理論）」あるいは、具体的なテーマとして「感情と動機づけの発達」「気質と性格の発達」「愛着の発達」「社会性の発達」「自己の形成」といったテーマを検討する。また、「青年期、成人期、老年期といった発達段階における心の働きと課題」を生涯発達から検討する。なお、この科目は公認心理師になるために学部で納めるべき科目で、公認心理師法第7条別表１の「認知機能の発達及び感情・社会性の発達」「自己と他者の関係のあり方と心理的発達」「誕生から死に至るまでの生涯における心身の発達」「高齢者の心理」を含んでいる。	
	教育・学校心理学	教育・学校領域を対象とした臨床心理学的支援の実際について講義を行う。 (オムニバス方式/全15回) （8　小林なぎさ/9回) 教育現場における心理社会的課題と必要な支援として、学習障害、スクールカウンセリング、教育関係者へのコンサルテーションや学校におけるアセスメント、チーム学校、学生相談、教育評価について解説する。 （63　浅井継悟/4回) 教育現場において生じる問題とその背景として、動機づけ、自己効力感、原因帰属、適性処遇交互作用、学習性無力感、不登校、いじめ、非行・暴力行為、教師―生徒関係、プログラム学習、発見学習進路指導・キャリアガイダンスについて解説する。 （8　小林なぎさ・63　浅井継悟/2回）（共同） 学校現場における公認心理師やスクールカウンセラーの役割について事例を交えて概説する。	オムニバス 共同(一部)
	青年心理学	青年期は生涯発達において重要な役割を持つ時期である。本講義では、これまでに蓄積されてきた心理学とその周辺分野の研究知見をもとに、青年期の心理と青年期の経験がその後の発達に及ぼす影響について取りあげる。具体的には、青年心理学という学問について説明したうえで、青年期の発達とアイデンティティ、認知的発達、ジェンダー、友人関係、家族関係、臨床的問題など、青年期に関連した幅広いテーマを取りあげる。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	健康・医療心理学	公認心理師が最も働いている領域は保健医療分野であり、心理職として、多様なニーズへの対応、より明確な貢献が求められるようになっている。また、保健医療分野に限らず、健康心理学や医療心理学について理解しておくことはクライエントのみならず、クライエントを取り巻く支援者、そして自分自身のメンタルヘルスにおいても重要である。本講義では、ストレスと心身の疾病や医療現場における心理社会的課題と支援、保健活動が行われている現場における心理社会的課題および必要な支援を中心に理解を深める。また、医療を中心に健康に関するシステムや制度や動向についても理解を深める。加えて、心身の健康の維持増進に関する理論と支援技法を理解し、医療・保健分野における活用の実際を学ぶ。更には、災害時における心理・社会的支援、問題と介入についても学ぶ。	
	福祉・家族心理学	福祉領域や、家族を対象とした臨床心理学的支援の実際について講義を行う。 (オムニバス方式/全15回) （12 木村能成／5回） 児童福祉分野や教育現場における、家族を対象とした実務経験をもとに、家族の発達や、現代の家族を取り巻くさまざまな臨床心理学的な問題について学ぶ。 （72 那須里絵／9回） 講師の実務経験をもとに、家族を対象とした心理学的支援に必要な知識・技術について学ぶ。また、児童虐待、子育て支援、引きこもり、高齢者、精神障害者に関する現状と心理学的理解について学び、それぞれに対する心理支援を概観する。福祉対象者の家族や福祉施設職員に対する心理支援についても検討する。他職種連携についても学び、それぞれの専門職の役割や、公認心理師の役割について理解する。さらに、社会福祉に関する制度や法律、倫理についても学ぶ。 （12 木村能成・72 那須里絵／1回）（共同） 家族に対する支援や、さまざまな福祉対象者への支援について、授業で学んだことを振り返り、より深く探究する。	オムニバス共同（一部）
	障害心理学	障害のある人がバリアーを感じることなく、社会に参加するには、私たち一人ひとりが障害についての正しい理解と認識をもつ必要がある。この授業ではまず、障害概念、障害のとらえ方の歴史的変遷について学ぶ。また、様々な障害についての基本的な知識を概説する。それを踏まえ、医療、教育、福祉等、各分野の支援の制度や、保護者やきょうだい児への支援、就労支援、地域での支援等の心理社会的課題について学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) （9 溝江 唯/8回） 身体障害（視覚障害・聴覚障害、運動障害等）、知的障害、言語・コミュニケーション障害、発達障害（自閉スペクトラム症、注意欠陥多動性障害、限局性学習症）、高次脳機能障害等様々な障害についての基本的な知識を概説する。また、保護者やきょうだい児への支援、就労支援、地域での支援等、実際の支援のありがたについて取り上げ、個人・家族・地域等への必要な支援について考えを深める。 （9 溝江 唯・62 竹尾 勇太/7回）（共同） 障害概念、障害のとらえ方の歴史的変遷について学ぶ。また、発達障害と併存する精神障害の理解と支援や、障害特性と合理的配慮、障害のある人をさせる制度や家族支援の実際について学ぶ。また、授業の後半には、事例を取り上げ障害特性や利用できる制度について理解を深めていく。	オムニバス共同(一部)

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会心理学	社会心理学に関する専門知識を、社会的な状況における具体的な行動と関連づけて、個々の事例を越えて俯瞰的に理解することが、この科目の目的ある。この目的に到達するために「自己の社会的構成」「社会的行動：向社会的行動と攻撃行動」「対人関係」「社会的認知」「偏見とステレオタイプ」「感情の機能」「説得と態度変化」「受容と排斥」「社会的影響：同調と服従」「集団間の関係」「リーダーシップ」といったテーマを検討する。これらに加えて、「文化」が、レディメイドの押しつけではなく、人々の心の働きとの相互構成であることを理解する。なお、この科目は公認心理師になるために学部で納めるべき科目で、公認心理師法第7条別表１の「対人関係並びに集団における人の意識及び行動についての心の過程」「人の態度及び行動」「家族、集団及び文化が個人に及ぼす影響」を含んでいる。	
	集団心理学	人間の集団（グループ）の心理学的特性、グループ・ダイナミクスに関する基本的な理論について学び、グループを用いた心理学的支援（グループセラピー）の歴史やその意義、理論を概観する。その上で、臨床場面における治療的グループ、心理教育的グループの意義について事例を用いて学習するとともに、体験的に理解を深める。その中で傾聴といった技法を学ぶと共に、グループの中で自身や他者の感情を理解したり、グループの中で他者から理解されるということの心理治療的意味を探究する。	
	産業・組織心理学	産業・組織心理学は、人が働くことを通じて経験する現象について心理学的視点から明らかにしようとする心理学の領域である。本授業では、労働環境における人間関係と意思決定、組織における人の行動、リーダーシップ、職場のストレスなどを扱う。また、ストレスに対する対処方法として適切なものもあればアルコールの過剰な摂取など、健康問題にとどまらず、労働の生産性を下げることにつながるような不適切な対処などについても扱う。これらに関して、社会心理学など、様々な心理学の領域における研究成果に基づき、産業活動における諸現象について学ぶことを目的とする。	
	心理的アセスメント	心理的アセスメントとは、公認心理師が心理学的支援を適切に行うための根拠となる心理査定のことである。心理査定の基本は、心理検査、行動観察、面接法であるため、本講義ではそれらの特徴や手法について概説する。また、心理検査の一部については、実際に体験し、結果の解釈まで行う。加えて、心理査定は、心理検査の実施や結果の解釈に留まらず、報告書にまとめて被検査者や関係者にフィードバックする必要があるため、心理査定報告書のまとめ方や伝え方の要点についても解説する。	
	心理学的支援法	医療、福祉、教育、司法、産業の現場において、心理学的支援法は幅広く用いられ、QOL向上に寄与している。このため、一学派の心理学的支援法では、クライエントの問題解決が困難である。この科目では、心理学的支援法の主要理論と方法に重点を置く、第10回までは「来談者中心療法」「心理力動論（精神分析）」「交流分析」「行動療法と認知行動療法」といった多様な理論を、また、第11回以降では「系統的脱感作、シェイピング、生活分析的カウンセリング」「サイコドラマとＳＳＴ」「ロール・プレイングとロール・レタリング」「内観法」といった技法を体験する。さらに「社会的責任と倫理」「心の健康教育」について学修する。この科目は公認心理師になるために学部で納めるべき科目で、公認心理師法第7条別表１の「代表的な心理療法並びにカウンセリングの歴史、概念、意義、適応及び限界」「良好な人間関係を築くためのコミュニケーションの方法」「プライバシーへの配慮」「心の健康教育」を含んでいる。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	司法・犯罪心理学	司法・犯罪領域における研究・実務に関して、公認心理師をめざす上で必須となる司法・犯罪心理学の基礎知識や、犯罪・非行の今日的な問題について理解を深めることを目指す。刑事施設・保護観察所で実施される加害者臨床プログラムにも関わる教員による実証的な知見の紹介や心理職の役割について考えていく。犯罪・非行の加害者や被害者の心理と彼らへの心理支援の方法、介入プログラムに関する具体的な手法、配慮すべき事項、公認心理師として司法・犯罪領域以外にも応用できる実践方法等についての理解の深められる内容を扱う。	
	人体の構造と機能及び疾病	本授業では、心身機能、身体構造、心理的支援が必要な主な疾病と障害について概説する。また、心身機能、身体構造、心理的支援が必要な主な疾病と障害に対する考えをまとめる。人体の身体は、非常に複雑な構造を有しており、同時に全体が相互に有機的に関係しあいながら、総合的なまとまりを持って機能している。そのような人体の構造と各部位の機能の特徴を整理し、互いの関連を明らかにしていく。また、身体が疾病や障害をとり上げながら概説する。さらに、心理的支援が必要ながんやその他の難病などの疾病についてもとり上げて検討していく。	
	精神疾患とその治療	精神疾患にはどのようなものがあり、それぞれどのような特徴をもっているか、疾患をどのように診断し治療するのか、治療法にはどのようなものがあるか。向精神薬をはじめとする薬剤により心身がどのように変化していくのか。精神医学の診断や治療の基本的な考え方を展望し、代表的な精神疾患の症状・経過・治療などについて解説するとともに関連法規や社会制度の概略を紹介する。そして、精神疾患の当事者をとりまく社会制度や援助のための社会資源はどのような現状にあるかなど、基本的な知識・理解の獲得を目的とする。昨今の当事者活動の盛りあがりや、多職種連携の必要性についても十分理解したい。	
	関係行政論	公認心理師などの心理専門職が心理的支援を行う場合に知っておくべき法律と行政的な施策、必要となる倫理について、この授業で議論する。心理的支援は、①保健医療分野、②福祉分野、③教育分野、④司法・犯罪分野、⑤産業・労働分野の５分野に大きく分けることができる。また、これらの分野をまたいで横断的に対応する必要がある心理的支援もある。これらの心理的支援を行う上で、どのような法律が関係するのか、法律も含めてどのような施策や制度が作られ展開しているのかを学んでいくこの授業では、心理的支援を行うものが必ずしっておくべき法律と行政的な仕組みについて学習する。また支援を行う上での倫理についても取り上げる。具体的な事例についてディスカッションする機会も設け理解を深める。 (オムニバス方式/全15回) (64 村山雄亮/4回) 日本の法制度および公認心理師法の心理業務を行うための法制度を理解する。 (5 野村照幸/3回) 保健医療分野の専門家と施設、法律と政策についてを学び、保健医療分野に関する制度を理解する (65 小野昇平/2回) 福祉分野の専門家と施設、法律と政策についてを学び、福祉分野に関する制度を理解する (65 小野昇平/2回) 教育分野の専門家と施設、法律と政策についてを学び、教育分野に関する制度を理解する (58 東本愛香/2回) 司法・犯罪分野の専門家と施設、法律と施策についてを学び、司法・犯罪分野に関する制度を理解する (59 新田千枝/2回) 産業・労働分野の専門家と施設、法律と政策について学び、産業・労働分野に関する制度を理解する。	オムニバス

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門専攻科目群	公認心理師の職責	臨床心理士かつ、公認心理師の資格を有し、病院の臨床現場で長く臨床実践や研究を行ってきた教員のもとで、公認心理師とはどのようなものか、どのような法的な知識が必要であり、どのような職責なのかについて具体的に学ぶ。内容としては公認心理師の役割や公認心理師の法的義務及び倫理はもとより、心理に関する支援を要する者等の安全の確保、情報の適切な取扱い、保健医療、福祉、教育その他の分野における公認心理師の具体的な業務、自己課題発見・解決能力、生涯学習への準備、多職種連携及び地域連携等を含む。また、公認心理師法も定義されていないが、研究も重要な取り組みと考え、研究的視点の重要性についても扱う。なお、生きた知識とするために、臨床現場で出会うジレンマや葛藤が生じる事案について具体的な事例を通じて理解を深める。	
	認知脳科学概論	生体の知覚、認知、行動は脳を含む神経系によって実現されている。そのため、心理現象を理解するためには、その神経メカニズムを理解する必要がある。本授業では、ハードプロブレムとしての心脳問題を入口としてその理解のために必要となる基礎知識を順に講義していく。様々なトピックスを取り上げて脳と心の関係を学習していく。心脳問題から意識的なプロセスと無意識的なプロセスの違い、クオリア、脳研究の歴史、ニューロンの働き、脳の進化、脳の発達、脳の障害といった観点から学習することで、脳と心の関係について説明できるようになることを目的とする。	
	神経生理学	神経系における情報処理の基盤となる神経細胞の機能について、細胞の電位発生機構や細胞間の情報伝達機構を中心に講義する。静止電位、活動電位と興奮の伝導、電位依存性イオンチャネル、細胞間情報伝達、化学伝達物質の放出機構、リガンド作動性イオンチャネル、受容体と細胞内情報伝達等の基礎的な知識獲得とそこから個体の行動に至るメカニズムを考えることができるようになることを目指す。個体の学習や記憶のメカニズムについて考察する。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	生態心理学	この講義では、ジェームズ・J・ギブソン（1904－1979）による生態心理学のアイディアについて、ギブソン自身やその後継者たちによる研究成果への考察を行いながら概観してゆく。ギブソン生態心理学では、知覚－行為の循環過程を通じて、人間や動物がそれらを包囲する生活環境との間に相補的関係を形成すること、そして、その様相の変化こそが心理行動学的な進化・発達・学習の本質であること、を主張する。しかし、これらの過程を具体的に支えるものとして提案される「アフォーダンス（affordance）」という「機能的な情報概念」は、伝統的な理論的枠組みの延長において解釈することが難しい。そこで、本講義では、「アフォーダンス」というアイディアの背景となる、「刺激と情報」、「不変項」、「知覚システム」、「直接知覚」といったギブソン生態心理学の骨格を構成するキーワードについて詳しく解説する。	
	心理療法各論A(認知行動療法)	認知行動療法は、医療領域においては、医療保険点数を請求できる日本国内で唯一の心理療法であり、福祉・教育・産業・司法といったあらゆる分野においても認知行動療法に基づく介入が行われるようになってきている。このことから、心理職にとっては 基礎的な知識を学習し、実践できることが求められる。具体的には、抑うつや不安や統合失調症、依存症などの精神科領域における援助の他に、心臓疾患や肥満、喫煙、飲酒などの生活習慣に至るまで様々な場面での理解が求められる。本講義では医療分野における認知行動療法の実践を念頭におき、その技法の理論的根拠や歴史的経緯を押さえながらより深く理解することを目指す。ただし、認知行動療法は介入技法ばかりがクローズアップされやすい面もあることから、実施するために必要なアセスメントなどの基礎的知識を適切に身に着け、その上で様々な介入方法についての理解を深めていく。	
	心理療法各論B(力動的心理療法)	力動的心理療法とは、広義には人間を生物・心理・社会的に規定される存在としてとらえようとする全体論的医学の観点に立つ心理療法を指す。狭義には力動的心理療法とは、フロイトが創始した精神分析における心的現象の捉え方の一つである力動的な立場、すなわち、人間の心的現象を心のなかの諸々の力の働きのせめぎあいの現れとして把握しようとする観点に立つ心理療法の一つであり、精神分析療法を修正した精神分析的心理療法と同一である。本授業では、力動的心理療法と精神分析療法の共通点と相違点、力動フォーミュレーション、力動的心理療法の過程における重要な内容（治療契約、転移と逆転移、抵抗、解釈と洞察、ワーキングスルー、治療の終結）についての理解を深める。さらに、力動的心理療法における支持的および精神分析的な聴き方についての模擬的な実践や討議を通して、力動的心理療法の技法についての体験的な知識を身につけることを目指す。	
	心理療法各論C(自然体験療法)	都市化・情報化が進む現代社会において、人と自然とのつながりは減少している。実際に先進国の成人では、1日の93%を屋内で過ごしているというデータもある。このような自然と人との断絶は、不安や肥満など心身の問題の増加と関連していると言われている。一方で自然の中で過ごすことは、うつ症状の軽減や精神的な疲労からの回復など、人の心身の健康やwell-beingに貢献することが明らかになっている。本授業では、自然環境での野外活動を利用した治療的効果を目的とする取り組みを自然体験療法（Outdoor experiential therapy）と総称し、まず各セラピーの基盤となる体験的なカウンセリングやエコサイコロジー等の理論について学習する。次に、ウィルダネス・セラピー、アドベンチャー・セラピー、ホース・セラピー、園芸療法、森林療法など各種の実践を取り上げ、その概念や方法、ケースについて理解を深める。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	司法精神医療	精神保健医療福祉における法制度や体制の変化の歴史は精神障害を抱えた人物による事件の歴史といっても過言ではない。本講義では2001年に池田小事件を契機に成立した「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律（医療観察法）」に基づく医療を中心に扱い、医師・看護師・公認心理師・作業療法士・精神保健福祉士の5職種が最先端の精神医療を実践について理解を深める。本講義では医療観察法の概要、医療観察法入院医療における多職種チーム（Multi-Disciplinary Team：MDT）の役割と業務、公認心理師の役割と業務、リスクアセスメントとリスクマネジメント、権利擁護、医療観察法通院医療におけるMDTの役割と業務といった内容を扱う。また、周辺領域として精神鑑定や医療刑務所における実践などについても扱い、これらの知識や実践の理解を深めることによって、公認心理師が関わる様々な領域や業務に活かせるようになることを目指す。	
	ブリーフ・セラピー	ブリーフセラピーとは、問題の原因を個人病理に求めるのではなく、問題は他者との相互作用のなかで維持されるという見方のもと、コミュニケーションの変化を促して問題を解決することを目指す心理療法で、近年、教育や医療に留まらず幅広い領域で用いられている。本講義では、システム論やコミュニケーション論に基づく「MRIアプローチ」及び問題が起きていないとき（例外）に着目する「解決志向アプローチ」、またそれらを折衷した「ダブルディスクリプションモデル」について、事例を交えて解説する。	
	プロセスワーク	プロセスワークとは、元々物理学者でのちにユング心理学を学んだアーノルド・ミンデルが、夢分析、量子力学、老荘思想、シャーマニズムなどを援用する形で創始し、今なお発展させ続けている心理療法、自己成長、関係性への取り組み、社会運動などに統一的に対応している体系である。ミンデルは「物事の自然な変化の流れ」を「プロセス」と呼び、「問題」を「プロセスの停滞」と考えた。このためプロセスワークでは「問題を解決する」ことよりも、「問題の中で周辺化されている側面に気づき、全体性を体感することで、問題が変容する」ことを志向する。この科目では、自己理解・他者援助力を高めるために、「夢」「身体症状」「関係性」「変性意識状態」などについての講義や演習を通して、プロセスワークの知識やスキルを身につけること、プロセスワークの知識やスキルを使い自身や他者の周辺化された側面に気づく力を養うこと、以上2点を目指す。	
	教育相談論	教育相談論は、相談という観点からみた心理学的支援法の応用と位置づけられる。学校現場における、児童・生徒の抱える教育上のさまざまな問題の解決に関心をもち、問題解決に向けて取り組み、社会の調和的発展に寄与することをことが、この科目の目的である。この目的に達するために、第1回目から第10回目においては「教育相談の基礎知識」「価値観の多様性」「来談者中心療法と聴くスキル」「感情をコントロールするスキル」「自己理解を深める」「児童・生徒のSOSサイン」「キャリア形成とキャリア教育」といった現実的なテーマを検討する。また、第11回目以降では「ロール・プレイインイング」を用いて「不登校」と「いじめ」について、児童・生徒の心理の理解と対応について検討する。	
	学校臨床心理学	学校臨床心理学は、学校教育領域における臨床心理学を基盤とした学問である。本講義では、学校臨床心理学の理論的枠組みについて説明したうえで、実際の臨床実践への適用について検討する。具体的には、教育学や発達心理学、教育心理学など学校臨床心理学の近接領域との関連や、様々な学校教育領域における学校臨床心理学の活用、学校臨床心理学の実際（問題解決的支援、予防的支援、開発的支援）などのテーマを取りあげる。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	精神分析学	精神分析とは、人間の言葉、行為、記憶、夢、空想、症状など、心的現象の無意識的意味作用を明らかにしようとするジークムント・フロイトが創始した探究方法であり、精神分析学とは、精神分析的な探究方法と治療方法によって得られる経験的素材よって体系化された理論に基づく学問である。本授業では、フロイトからはじまる精神分析について、様々な学派の理論や主張について比較しながら精神分析理論の概要について理解を深めていく。具体的には、意識と無意識、心の構造論モデル、自我の防衛機制、夢の解釈、精神性的発達論、精神分析療法の基盤となる内容（転移と逆転移など）と治療の実際など、精神分析学の基礎的な知識を身につけていく。さらに、アンナ・フロイト、クライン、ビオン、ウィニコット、ラカンなど、ジークムント・フロイト以降の精神分析学のその後の展開についても認識を深めていくことを目指す。	
	発達と障害児の心理	この授業では、主に発達障害（自閉スペクトラム症、注意欠陥多動性障害、限局性学習症）、言語・コミュニケーション発達の遅れ、知的障害等を取り上げ、定義や特徴について学ぶ。また、これらの障害に関連する認知発達、言語発達、社会性の発達等、発達の基礎的な知識について学び、両者の関連について理解を深められるようにする。その上で、実際の臨床場面（乳幼児健康診査の場・保育所・幼稚園・学校教育・療育施設等）における事例を取り上げながら、支援方法や対応上の工夫について考察していく。これらの内容を通して、インクルーシブの考え方について理解を深める。	
	健康・医療におけるコミュニケーション論	心理学の知見は、健康な人から精神的不調や困難を抱えた人に至るまで、様々な対象に適用されている。本講義では、臨床心理学の視点から、健康・医療におけるコミュニケーションについて、その問題や新たな展開を含め、理解を深めることを目指す。具体的には、健康領域における心理学の役割、ストレスの成立とストレスマネジメント、アサーション、リラクセーション、医療領域における心理学の適用などのテーマを取りあげる。	
	運動学習論	人の身体運動の制御・学習を中心に、コンピュータ類例に基づく情報処理論的アプローチとギブソンの生態学的知覚論、あるいは複雑系科学などの力学系理論からのアプローチについて学ぶ。自らが体験しながら、身体運動の制御や学習の理論について学ぶことを目的とする。さらに、こうした運動制御・学習理論に基づき、日常生活における運動やスポーツスキルの獲得に関しても学ぶこととなる。身体の動きがいかに心、あるいは人の理解につながっているかに気づくことを目指す。	
	健康運動心理学	運動が心身の健康に及ぼす影響について、最新の研究結果を踏まえて健康に関する心理的要因について検討する。 （オムニバス方式/全15回） （1 山本裕二／4回） 健康心理学と健康運動心理学の相違、我が国の健康の実態及び求められる健康スポーツの心理学的意義、心理発達に及ぼす身体活動の影響、身体運動への参加・継続を高める方法について検討する。 （11 千葉陽子／4回） 身体運動の抗うつ・抗不安効果、セルフエスティームおよびストレスに与える効果、競技スポーツにおけるメンタルヘルスについて検討し、自身の健康増進のための運動処方を作成する。 （53 越智元太／5回） 脳科学の視点から疲労を理解し、ストレス状態の評価を通したコンディショニング法およびトレーニング方法、身体運動の認知機能への効果、認知機能を高める身体運動の方法、認知障害に対する運動療法の可能性について検討する。 （1 山本裕二、11 千葉陽子／2回）（共同） 身体運動の効果のメカニズム、学修した理論の実践例について理解を深める。	オムニバス共同（一部）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ダンス・セラピー	ダンスセラピーはダンスや動作で健康を維持・増進・回復し、心身の不調を改善するメソッドである。アメリカダンスセラピー協会では、ダンス/ムーブメントセラピーと称して、これを「個人の感情的、社会的、認知的、身体的統合を促進する一過程としてムーブメントを心理療法的に用いることである」と定義している。本科目では多様な身体における表現の創造を軸に、ダンスセラピー的な要素が心身に与える影響を究明していく。特に、重症心身障害児・者や身体障害児・者の車いすダンスの基礎を実践から学び、個々の身体の可能性とこころの関係性を探っていく。これらの学びは多様な身体の心身の可能性を拓く方法の１つとして、医療福祉現場でのボランティア活動等にも積極的に活かせることを目標とする。	
	ボディワーク	「からだに働きかける」という意味のボディーワークは、身体やこころの不調を、マッサージなどの受動的な方法での働きだけではなく、身体とこころをつなげるための気づきを自らがおこなう、身体調整法（ボディワーク）です。本授業はそのボディワークの一つとしてあげられる、呼吸法を取り入れたボディコントロールのエクササイズを通して、日常生活でのボディコンディショニングづくりに役立てる方法を学び、身体構造を理解し、からだの探求・調整を通して自分のイメージ通りに動かすことのできる身体づくりを目指す	
	キャンプ・カウンセリング	キャンプ・セラピー（Camping therapy）とは、日常生活から離れた豊かな自然環境の中で、クライエントとカウンセラーとの生活を含む野外活動などの直接体験から生ずる出来事やその課題に取り組みながら、クライエントの身体的、心理的、社会的なリハビリテーション、発達、成長を援助する方法である。本授業では、キャンプ・セラピーの場におけるカウンセリングを体験的に学習することを目的としている。心身と自然とのつながりについての見立てを実施し、野外活動の各プログラムのファシリテーション、キャンプにおけるクライエントとカウンセラーとの治療的関係、適切な介入方法、野外におけるサイコロジカル・ファーストエイドなど、キャンプ・カウンセリングを実施する上で必要な技能の習得を目指す。	
	心理健康科学特別講義A	基礎心理分野において先駆的・精力的な研究を行っている研究者に、その領域の最新の研究成果を紹介してもらい、受講生が最新の知見を得ることを目的とする授業である。また、その研究者の取り組み方にも言及していただき、受講生が心理学研究の楽しさ、面白さなどを実感できる「本物に触れる」授業を目指す。	
	心理健康科学特別講義B	臨床心理分野において先駆的・精力的な研究を行っている研究者に、その領域の最新の研究成果を紹介してもらい、受講生が最新の知見を得ることを目的とする授業である。また、その研究者の取り組み方にも言及していただき、受講生が心理学研究の楽しさ、面白さなどを実感できる「本物に触れる」授業を目指す。	
	心理健康科学特別講義C	運動心理分野において先駆的・精力的な研究を行っている研究者に、その領域の最新の研究成果を紹介してもらい、受講生が最新の知見を得ることを目的とする授業である。また、その研究者の取り組み方にも言及していただき、受講生が心理学研究の楽しさ、面白さなどを実感できる「本物に触れる」授業を目指す。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	心理演習	心理に関する支援を要する人々への心理的支援を実践するために不可欠とされる基本的な知識及び技能の修得を目標とする。 上記の目標を達成するため、以下の事項について事例検討やロールプレイングを行う。 （ア）心理に関する支援を要する人々に関する以下の知識及び技能の修得 （1）コミュニケーション　（2）心理検査　（3）心理面接 （4）地域支援　等 （イ）心理に関する支援を要する人々の理解とニーズの把握及び支援計画の作成 （ウ）心理に関する支援を要する人々の現実生活を視野に入れたチームアプローチ （エ）多職種連携及び地域連携 （オ）公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解	共同
	心理実習Ⅰ	保健医療分野、教育分野、福祉分野、司法・犯罪分野の臨床現場に赴き、実習を行う。また、実習に伴う事前事後学習も大学内で実施する。加えて、公認心理師の有資格者で、臨床経験をもつ教員による指導も行われる。具体的に心理実習Ⅰでは、心理の専門家が働く保健医療分野と教育分野における施設において見学による実習をすることで、クライエントやユーザーに対する支援、他の職種との連携及びチームアプローチ、地域連携、公認心理師としての職業倫理及び法的義務について理解を深めていく。	共同
	心理実習Ⅱ	保健医療分野、教育分野、福祉分野、司法・犯罪分野の臨床現場に赴き、実習を行う。また、実習に伴う事前事後学習も大学内で実施する。加えて、公認心理師の有資格者で、臨床経験をもつ教員による指導も行われる。具体的には、心理実習Ⅱでは、心理の専門家が働く保健医療分野、教育分野、福祉分野、司法・犯罪分野における施設において見学による実習をすることで、クライエントやユーザーに対する支援、他の職種との連携及びチームアプローチ、地域連携、公認心理師としての職業倫理及び法的義務について理解を深めていく。	共同
	インターンシップ実習	様々な業界の民間企業等に赴き実務実習を行う。実習に望むに当たっての事前準備として自己分析や業界・企業分析、必要なビジネスマナーやコミュニケーションについても学ぶ。そのうえで、民間企業等において、５日程度の実務実習を行い就労体験を行い「働くこと」への理解を深め、自らの卒業後のキャリアについて考える。実習後はレポートを作成し、内容やそこから得られた経験・学びについて個別面談にて担当教員に明確に説明できるようにする。	
	心理健康基礎ゼミ	少人数のセミナー形式で、心理学及び心身の健康に関する様々な分野についての基本的な知識を得るために、受講者の興味・関心に基づき自主的・主体的にテーマを設定し、学習できるようにする。また、受講者同士の建設的な議論を通じて、それぞれのテーマの理解を深めるとともに、他者の意見を理解する対人コミュニケーション能力の獲得を目指す。さらに、将来の研究テーマを見つけることのできるような自立的学習能力を身につけることを目的とする。教員の研究分野に応じて多様なテーマを用意する。	
	専門ゼミⅠ	少人数のセミナー形式で、心理学及び心身の健康に関する様々な分野について、より専門的な知識・技能を得るために、受講者の興味・関心に基づき自主的・主体的にテーマを設定し、学習できるようにする。受講者自らが問題を発見し、その問題の解決方法を探るための方法論を習得することを目指す。また、受講者同士の建設的な議論を通じて、それぞれのテーマの理解を深めるとともに、他者の意見を理解する対人コミュニケーション能力の獲得も目指す卒業研究につながるようなテーマの発見ができるよう、教員の研究分野に応じて多様なテーマを用意する。さらに、研究を実施するにあたっての個人情報保護や研究倫理に関しても各セミナーで共通授業として学生が学ぶようにする。	

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（社会福祉学部心理健康学科等）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	専門ゼミⅡ	少人数のセミナー形式で、心理学及び心身の健康に関する様々な分野について、より専門的な知識・技能を得るために、受講者の興味・関心に基づき自主的・主体的にテーマを設定し、学習できるようにする。受講者自らが問題を発見し、その問題の解決方法を探るための方法論の習得とプレゼンテーション能力・コミュニケーション能力を養成することを目指す。卒業研究につながるようなテーマの発見ができるよう、教員の研究分野に応じて多様なテーマを用意する。	
	卒業研究A	「ヒト」「人」「人間」をめぐるさまざまな問題を明らかにするための、心理学及び心身の健康に関する専門的知識および調査・分析方法を学び、研究遂行能力を習得することを目的とする。「卒業研究」は、心理健康学科の学生が、心理学及び心身の健康に関する4年間の学修の最終段階として作成する最も重要な課題である。卒業研究Aでは，心理学一般の学習成果を各自の関心において再構成し、指導教員の研究指導に従って各自の研究テーマを設定、展開する。	
	卒業研究B	「ヒト」「人」「人間」をめぐるさまざまな問題を明らかにするための、心理学及び心身の健康に関する専門的知識および調査・分析方法を学び、研究遂行能力を習得することを目的とする。「卒業研究」は、心理健康学科の学生が、心理学及び心身の健康に関する4年間の学修の最終段階として作成する最も重要な課題である。各自の関心において設定したテーマに沿って、指導教員の研究指導に従って卒業論文として仕上げる。	